

# ひがしなり

みつめよう我がふるさと



# ●目次●

|                     |    |
|---------------------|----|
| まえがき                | 3  |
| ものづくり伝統工芸           | 4  |
| 深江と鑄物               | 4  |
| 鑄物の伝統工芸技術           | 6  |
| 深江の菅笠               | 7  |
| 「かつら」一筋             | 8  |
| ものづくりベンチャー企業        | 9  |
| ものづくり文化             | 10 |
| 小さなおもちゃの博物館         | 10 |
| 深江の菅細工              | 12 |
| トンボと自然を考える会         | 14 |
| ものづくりのまち見学会         | 16 |
| 伝統文化・芸能             | 17 |
| 伝承民謡・民踊             | 17 |
| 区内のたんじり             | 18 |
| 地図で見る東成の移り変わり       | 21 |
| (浪華図・浪華往古図)         | 21 |
| (摂津河内絵図)            | 22 |
| (明治18年の測量図)         | 24 |
| (明治18年淀川大洪水浸水区域図)   | 25 |
| (大正10年の測量図)         | 26 |
| (昭和2年第1次東成区域図)      | 28 |
| (昭和8年第2次東成区域図)      | 30 |
| (昭和21年第3次東成区域図)     | 32 |
| (昭和44年東成区域図(住居表示前)) | 34 |
| (現在の東成区域図)          | 36 |
| 空から見た東成             | 38 |
| 大阪のおいたちと東成のかかわり     | 40 |
| 原始時代の大阪とひがしなり       | 40 |
| 古代の大阪とひがしなり         | 40 |
| 中世の大阪とひがしなり         | 40 |
| 近世の大阪とひがしなり         | 41 |
| 東成のおいたち             | 42 |
| 地名の起り               | 42 |
| 行政の移り変わり            | 43 |
| 明治のひがしなり            | 44 |
| 大正のひがしなり            | 44 |
| 昭和のひがしなり(終戦まで)      | 46 |
| ふるさとの史跡             | 47 |
| 暗越奈良街道にそって          | 47 |
| 平野川と玉津橋             | 51 |
| 平野川周辺の旧跡            | 52 |
| 区内の社寺               | 53 |
| ふるさとの文化財            | 54 |
| 東成区を横切る暗越奈良街道       | 56 |
| 道の果たした役割—暗越奈良街道—    | 56 |
| 区勢のあらまし             | 58 |
| 郷土ひがしなり略年表          | 59 |

図画……杉村清秀氏画「暗越奈良街道道中図」

# まえがき



## 〈東成区ものづくり文化の広場〉

区民の皆様には、常日ごろから区政の各般にわたり深いご理解と多大のお力添えを賜り深くお礼申し上げます。

この度東成区のまちづくりの一環として、「ものづくり文化の広場」の準備をしてきました。区役所は、広報紙の発刊、広聴業務を初めとして地域に密着した総合サービスを展開しています。東成区のまちづくりについては、住民の声を聞きながら、区民のニーズを把握しながら進めることが重要であり、平成10年度においては、区職員などから成る「東成区まちづくり検討委員会」を設置し、区民参加のまちづくりについて検討してきました。

東成区は、菅笠・鋳物といった伝統的なものづくり、ものづくりの老舗・ベンチャー企業の活動など、ものづくりに関わる人材、知識、経験、技術などが集積する「ものづくり文化のまち」としての特徴を有しています。

また、区内には約8千人の外国人が居住し、近年では、区内の国際交流団体・NGOが区内外・国内外で活動し、「多文化が共生しネットワーク活動が生まれるまち」としての特性も有しています。

こうした地域の特性を生かし、国内外から東成区を訪れる人々に、区民の心のごもった手づくり作品を贈り、東成区や大阪の文化紹介、区民の国際交流に寄与することを目的として、「東成区ものづくり文化の広場」を設置することに致しました。

設置にあたり、「東成区ものづくり文化の広場」設置要綱に基づき運営委員を選出し下記の方々が役員に成っていただきました。

### ●「東成区ものづくり文化の広場」運営委員会

|       |         |                     |
|-------|---------|---------------------|
| 会 長   | 岡 田 三 朗 | (社)トンボと自然を考える会近畿支部長 |
| 副 会 長 | 幸 田 正 子 | 深江管細工保存会代表          |
| 委 員   | 小 林 俊 雄 | (財)大阪府国際交流財団        |
|       | 桂 福 車   | 上方落語協会幹事            |
|       | 田 村 太 郎 | 多文化共生センター代表         |
|       | 十 時 理 祐 | (社)東成工業会青年会会長       |
|       | 樋 口 宇 乃 | 豆玩具(おまけや)ZUNZO      |

# ものづくり 伝統工芸

## ●深江と鑄物

往古、深江に移り住んだ笠縫<sup>かさぬい</sup>氏の祖先は、代々、皇祖の御神鏡を守護したと伝えられています。

深江稻荷神社に天津麻羅大神という鑄物師の守り神がまつられていることから分かるように、深江は古くから鑄物とのかかわりが深い土地であったと思われます。今も深江稻荷神社では毎年11月に火焚き祭（ふいご祭）が行われています。

昭和48年（1973）の伊勢神宮式年遷宮<sup>しまねんせんぐう</sup>の時には、稻荷神社前の釜師、故角谷一圭（本名＝辰治郎）さん謹作の白銅（銅と錫の合金）の御神鏡31面が献納されました。

角谷さんは、明治37（1904）年に深江で生まれ、小学校に入るが、入らない頃から炭割り、型運び、夜なべのカンテラ照らしと、鑄物師であった父親の手伝いをし、鑄物造りの修業を積み茶ノ湯釜を造る釜師になりました。

角谷さんは、鎌倉時代にはじまり室町時代に隆盛を極めたが、その後衰退し、幻の釜と呼ばれた芦屋釜の再現に取り組み、試作研鑽ののち見事に“芦屋釜”の伝統を伝える釜の製作に成功され、

昭和53年（1978）には茶ノ湯釜製作の第一人者として文化庁から重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されました。

### 【和鏡の造り方】

まず真土と呼ばれる砂と土を混ぜた無文の鑄型を造り、その上に和紙に描かれた下絵を置き、金属製の籠で直接文様を押しくぼめていく、いわゆる原型を用いず鑄型の製作から始める方法です。鏡背面鑄型は、湯口・湯道を造り部分強力乾燥の後、鏡面、背面の鑄型をしっかりと固定

し、地金を溶解して鑄込み、すっかり温度が冷えたところで鑄はなした後、水銀と錫で磨きあげます。

角谷さんは、20年毎に伊勢神宮の御神宝を取り替えるのは、「日本の伝統工芸を絶やさない意味でもあるんです。御遷宮のたびに新しく製作することにより技術の伝承ができるんです。……」と話されていました。

### 【茶釜の造り方】

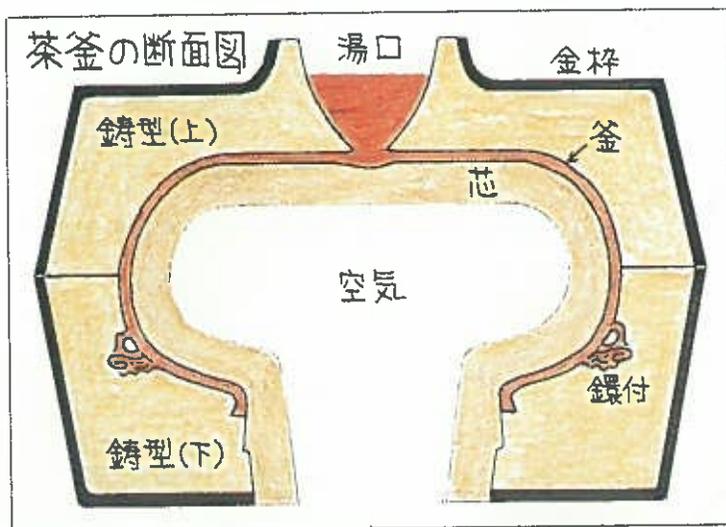
まず形を決めて紙型を切り、それを鉄板に押し、廻し形により鑄型を造ります。鑄型は、鑄物砂と粘土を混ぜ合わせて、上下、二つ造ります。

文様を鑄出す場合は、薄い和紙に墨または朱で下絵を置き、鑄型に水で張り付け、籠で押し込むようにして文様を付けます。これを籠彫<sup>へらぼり</sup>とか籠押<sup>へら押し</sup>といいます。

鑄付は、形・文様に合わせて、松の実・結文・獅子などの型を鑄型にはめ込み釜肌<sup>かまがみ</sup>に付け、焼きます。

芯を造り鑄型へ詰め込み、厚さ20<sup>mm</sup>位に乾燥させて抜き取り、釜の厚さの部分<sup>あし</sup>を削ります。鑄込んだ後、芯を取り出す際に土離れをよくするため芯に木炭の粉を水で解いて塗ります。また、鑄型は煙でいぶします。これも、溶解した地金が1400度の高温でも型離れをよくするためです。

出来上がった釜は更に焼いて鑄止めをし、仕上げは漆で焼き付けをします。





和銃 霞馬ノ凶線口釜



茶釜の鑄込み



製作中の故角谷一圭氏

御神宝鏡



## ● 鑄物の伝統工芸技術

### 大谷相模掾鑄造所

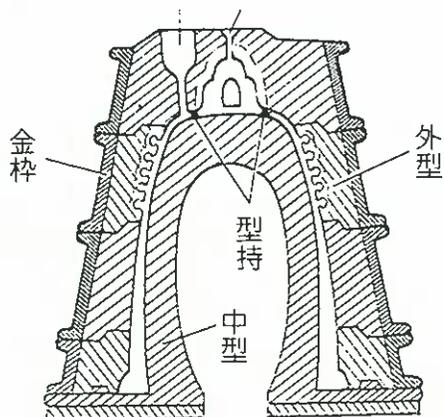
永禄初年、神社・佛閣献納品の製作を始め、昭和32年1月(株)大谷相模掾鑄造所になる。

城の復元工事では、昭和33年名古屋城天守閣の金の鯨(しゃちほこ)、福島県会津若松城、静岡県掛川城、岐阜県墨俣(すのまた)城のなど天守閣の鯨の復元製作。

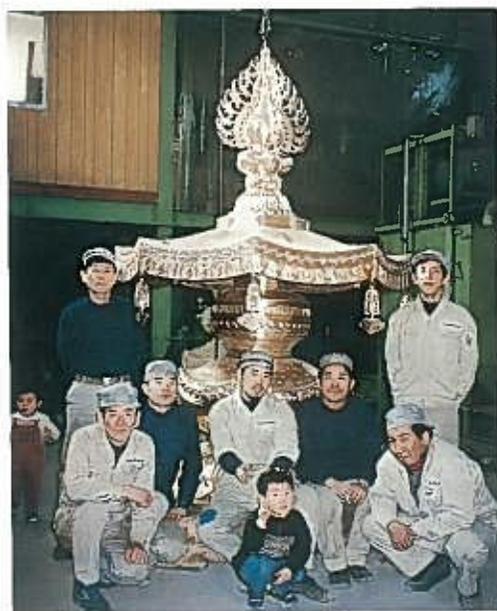
寺社仏閣では、野上八幡宮の梵鐘(ぼんしょう)、平城宮跡朱雀門の復元・鷗尾(しび)及び金具一式、葎島神社青銅灯籠大修理、東大寺大仏殿大修理などを手掛け、また区内では深江稻荷神社本殿金具一式と、全国の国宝、重要文化財、城・寺社仏閣、棟飾などの復元修理を手掛けている。

鑄物は、砂や粘土などで作った鑄型に溶かした鉄や青銅(銅とすずの合金)を流し込んで作る鑄物。

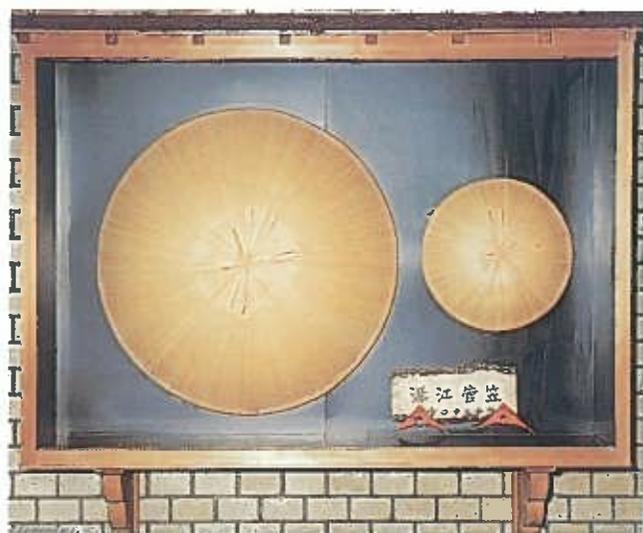
永年の鑄物作りに、大谷相模掾鑄造所代表者大谷秀一さんに、国の文化財保護審議会で平成11年度鑄物製作部門「選定保存技術保持者」に認定されました。



梵 鐘 型



## ● 深江の菅笠



深江菅笠

江戸時代の学者、本居宣長は「玉勝庵」という書物の中で、「笠縫島は、今 摂津国東生郡の深江村という所なるべし……」と、書いています。

昔、深江は良質の菅草が豊かに自生する浪速の一島でしたが、第11代垂仁天皇の御代に、大和国笠縫邑より、笠を縫うことを仕事とした一族が移住し、代々菅笠を作ったことから、笠縫島といわれるようになりました。

以後、歴代天皇御即位、大嘗祭の時をはじめ、20年に一度の伊勢神宮式年遷宮に使用する菅笠はすべて深江で作られ献上してきました。

江戸時代には大阪玉造の二軒茶屋を起点として、伊勢音頭をうたいながら、集団で参宮したのですが、人々は道中安全を願って、(菅には浄めるはたらきがあると信じられていました) 深江で菅笠を買って求め賑やかに旅をしました。

江戸時代の末期からは菅の釜敷きや、瓶敷き、皿敷き(今のコースターのようなもの)などの菅細工も作られ、皿敷きは明治や大正の頃には、イギリスやアメリカにも輸出されました。

菅笠作りの技術は、深江南3丁目の幸田ナミ子さんを中心に今日まで大切に受け継がれています。

また、深江稻荷神社の鳥居横には、「大阪府指定史跡摂津笠縫邑跡」の碑と、「深江菅笠ゆか

りの地」の大阪市顕彰碑が建てられています。

“押し照るや 浪速菅笠置き古るし  
後は誰が着ん 笠ならなくに”

(万葉集)



奉納菅笠製作中の幸田ナミ子さん



いろいろな菅細工

## ●「かつら」一筋

日本で唯一の文楽、歌舞伎、舞踊、演劇等のかつらを製造。

一言に「かつら」といっても多種多様。大きく分けて、日本髪かつら・洋かつら・男性かつら・ヘアピースがある。

日本髪かつらは、結婚式に使用する花嫁用、芸妓さんが使うもの（これを業者間では「地かつら」と呼んでいる）、男性かつら、女性の洋かつらは、外国との文化交流も盛んになり、ヘアスタイルの流行も国際的になってきて、さまざまなかつらが使われるようになった。

かつら作りの原材料は主に中国から、人毛、カラ毛（ヤク牛のしっぽ）などを輸入され、羽二重通し、蓑編み、鋏、針、などで加工、整毛、洗毛、染色をして、製造出荷している。川村かつら店は、大正7年かもし屋として創業。昭和37年に川村勝美さんが、現在の(株)川村かつら店を設立。

平成8年川村勝美さんは、長年にわたる床山への技術協力、紙材料と結髪の備品の調達・修理に対し、日本芸術文化振興会国立劇場創立30周年記念功労者表彰を受ける。



# ものづくり ベンチャー企業

## ● E Tの自転車

1982年に公開された映画“E T”の中で月に向かってE Tと主人公のエリオット少年がBMXに乗って空を飛んでいるシーンの中で使用された自転車です。

このシーンで使われたBMX用自転車を製造されたメーカーが東成区にあります。

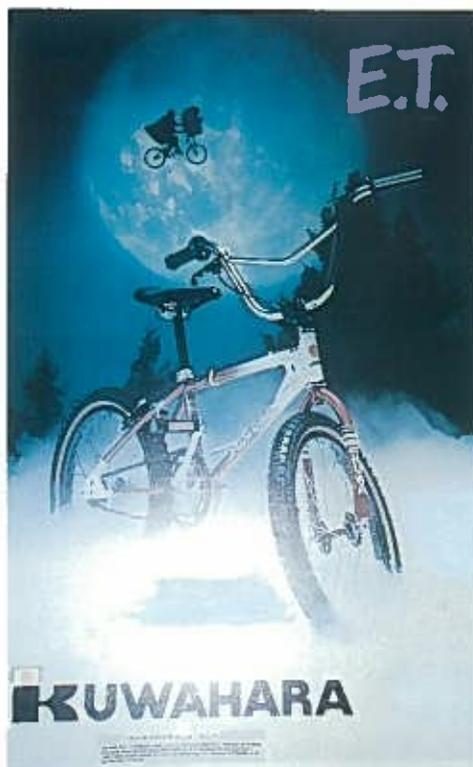
1918年に自転車部品製造が主な業務として創業開始。創業者の自転車製品設計が得意でいろいろなオリジナルパーツなどを製造販売しているうちに、普通の自転車ではなくオリジナルな製品を販売すべく海外での生産を開始。1980年代にはクワハラBMXチーム名でアメリカ国内でもトクロス競技に参加、参戦していた頃、ユニバーサルスタジオよりBMX40台の注文を受ける。

平成8年にはゴブリンと言う名前の20インチストリートバイクでヨーロッパデザイン賞を獲得、ロンドンのデザイン博物館において日本車では初めて4ヶ月間展示されました。日本国内でもゴブ

リンは中小企業優秀賞を受賞しました。

最近はオリンピック種目にもあるDH(ダウンヒル)や、パラリンピックタンデム(2人乗り)競技用自転車も手掛けています。

(株)桑原インターナショナルは、シドニーで行われるパラリンピックタンデム競技日本代表用の自転車として使用されます。



# ものづくり文化

## 《ものづくり文化の広場では》

大人も、こどもも作ることの大切さ、楽しさを未来に伝えていくこと、おもちゃを介して、人と人との出会い、交流の場をつくり出すことを目的として、ものづくり文化の広場がある。

### ●小さなおもちゃの博物館

東成区大今里西にある大阪セルロイド会館内に小さなおもちゃの博物館がある。

昭和初期に建てられた大阪セルロイド会館の3階に博物館をオープンしたのは、1998年4月1日、「おまけ博士」と呼ばれる宮本順三(85歳)館長がペンネーム「ズンゾ」と豆のように小さなおもちゃ「豆玩具」から「おまけやズンゾ」として開設した。

小さくても夢いっぱい博物館には、世界のおもちゃや郷土玩具も展示され、その数3000点にもおよぶ。

大正・昭和・平成とそれぞれの時代を反映したおもちゃは、大阪の古い郷土玩具・生玉人形や角力人形、住吉の俵蔵出し、猫とねずみなど、当時の大阪人のゆったりとした遊びごろをしのばせる。

宮本順三館長はグリコに入社「おまけ係」として数々のおまけを考案され、また、世界中の小さなおもちゃや民芸品、郷土玩具のコレクションもされ、その一つ一つに込められた「作った人の心と手のぬくもり」を訪れる人に伝えたいとの思いから小さなおもちゃ博物館をつくられた。

この博物館の建物は昭和12年に櫛会館として完成、昭和5年建設された区役所旧庁舎と酷似した大阪セルロイド会館は当時としてはモダンな建物で昭和初期のレトロな雰囲気も現在も残している。

「おまけやズンゾ」は月曜日休館、開館日は火～日曜日・祝日(一般)、団体は火・水・木で(予約必要)。開館時間は午前10時～午後5時まで。また、季節毎におもちゃ作り教室なども開催しています。

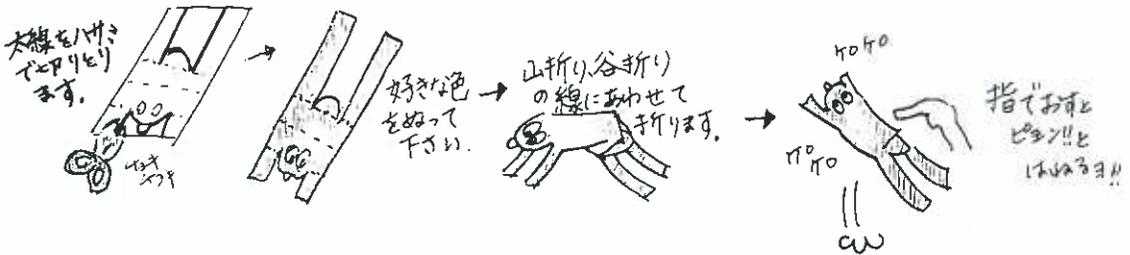


## 紙工芸 作り方

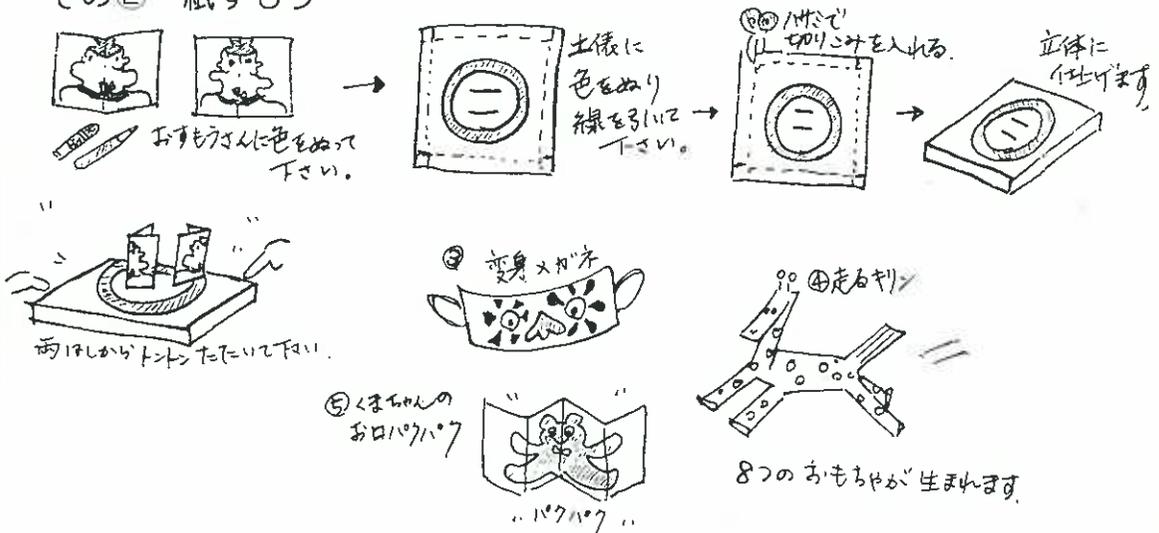
一枚の紙からいろいろなおもちゃが生まれる!!

～おまけ博士のアイデアおもちゃづくり～

### その① 飛び跳ねかえる (テーマ・創意/工夫)



### その② 紙ずもう



## ●深江の菅細工

深江は良質の菅草が豊に自生する土地で、昔から菅細工が盛んに作られていた。

江戸時代には伊勢参宮の際には「笠を買うなら深江が名所」と謳われたほど有名で、菅笠を買い求める事が旅の常となっていた。

現在も菅笠作りを初め釜敷きや、瓶敷き、円座、皿敷き（コースターのようなもの）なども作られて受け継がれている。

現在深江では原材料が自生しなくなり、菅のほとんどが富山県など北陸地方から取り寄せている。また教育学習などで使う菅を学校の校庭にも自生させればと努力している。

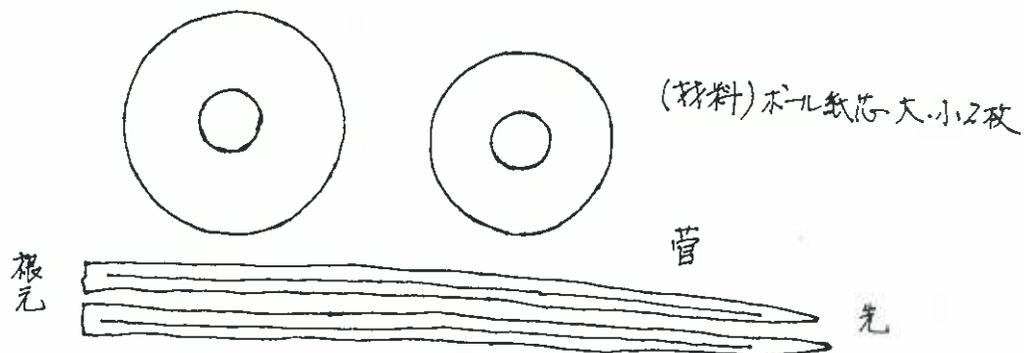
この伝統ある菅細工を将来にわたって、保存・活用するため平成11年11月に「大阪市指定無形文化財」として深江菅細工保存会が認定された。

深江菅細工保存会では教育研修会や、地域などを通じて伝統工芸を“楽しく”広めようとコースターづくり等を行い努力されている。



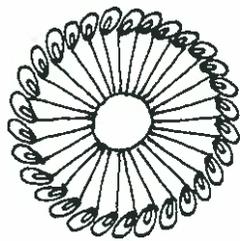
# 管細工の作り方

## 管びん敷工程表



(工程)

- ① 大小のボール紙芯を重ねる
- ② 管を根元の方からボール紙の下より差し込む
- ③ 管でボール紙をはさんで重ね合わせ、4cm程でカット
- ④ 先端の4cmの部分を右廻しにひねる
- ⑤ 光の工程でひねり巻きた部分を手前に1目作り余った先端を2枚のボール紙の間に差し込み固定する
- ⑥ 工程②～⑤までを順次くりかえし仕上げる



仕上り

## ●トンボと自然を考える会

トンボの楽園ができれば。大阪につくったらとの思いは、誰しも考えることです。

小学校のグラウンドの端にトンボ池をつくっているとところもあると聞きます。

開発に追われてどんどん消えていく、トンボ、メダカ、カエル……。

これらの生きた姿を見せる事、世話をする事で、環境教育、情操教育に役立たせるのが狙いです。「東成区ものづくり文化の広場」がつけられたのも、まちづくりとしてみんなで考える事の大切さ、ものづくりの大切さを学んで行くことです。

☆心豊かにし、創造力を高める手づくり。

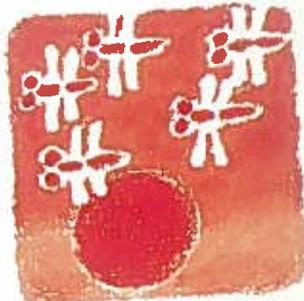
モールドトンボは、カラフルなモールドをねじり、動く目玉をつけ、カラーペーパーの羽をつけ、それをピアノ線に通して、淀川沿いに生えているセイタカアワダチソウの茎にとりつけると、ユラユラと揺れる楽しいトンボのおもちゃの出来上がり。

次いでセミのおもちゃ、昔からある竹製のものを現代風にアレンジ。紙を主体として誰でも手軽に作れるように工夫をし。セミのイラストを自分



トンボの岡田さんと子供たち

ゆ



夕焼けの  
空にたくさん  
トンボとさん

み



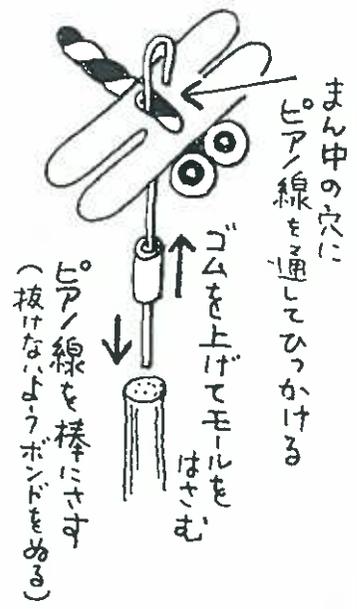
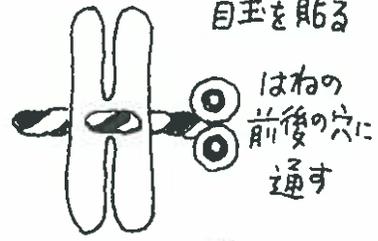
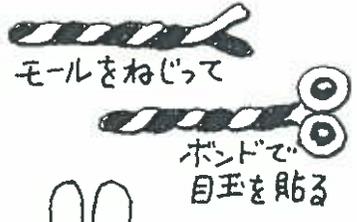
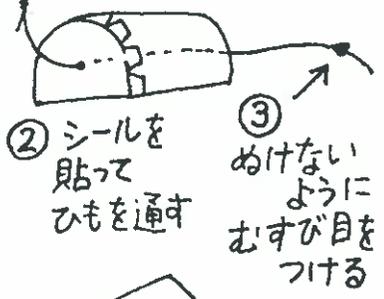
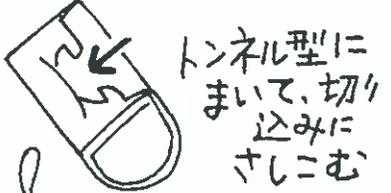
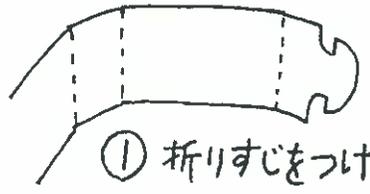
で描き、クラフトとアートの楽しみを取り入れた一石二鳥の作品です。

十年程前から東中本小学校で毎年トンボ教室を開き、児童にトンボのお話とおもちゃ作り、トンボかるた、紙トンボ、モールドトンボ、トンボブンゴマなどいろいろなおもちゃを作ってきました。

(社)トンボと自然を考える会、理事のオルファ(株)取締役の岡田三朗さん(65歳)は、高知県中村市にある清流四万十川でトンボ保護区ができ、全国に広がって、自然を考えた環境教育、情操教育にも役立っている。

つくることは暮らしの原点、東成区のものづくりの現場を見せていただき、また人々と交流し、楽しく勉強していきたいと思っています。

# トンボとセミの作り方



●ものづくりのまち見学会 (平成11年11月29日(月) 午後1時から実施、参加20名)

◆豆玩舎(おまけや) ZUNZO

(大今里西2-5-12 大阪セルロイド会館3F)

「豆玩舎ZUNZO」博物館は、遊びの知恵と工夫を子どもたちに教えるとともに、大人と子どもの交流の場を作り、ふるさと大阪の遊びを伝え、世界の玩具や民芸品のコレクションを通じて、世界の大衆文化に触れ、おもちゃ作りを通して物を大切にすること、創意工夫の楽しさを経験する場を目的として開館しています。



◆玉初堂(線香)

(中道1-5-13)

【香り】を創って190年。お香、お線香の製造元です。

創業は文化元年(1804)、香りの文化は遠く平安の昔に始まり、根強く時代とともに生き続けています。また最近では「お部屋で楽しむ香り」として楽しまれています。



◆(株)オルファ(カッターナイフ)

(東中本2-11-8)

オルファは、1956年に「折る刃」式カッターナイフの第1号として創案。

安全性を第一に考えたいろいろなカッターナイフを開発し、国内及び世界にも名の通った会社です。

“切る”ことが生み出す無限の可能性をサポートしています。



# 伝統文化・芸能

## ●伝承民謡・民踊

### 笠縫唄（菅笠踊り）

笠をせいでいして 笠倉建てて  
村の庄屋どんに負けぬよに  
佐渡の金山遠いと思たら  
笠をせいでいすりゃお手の内  
歌をうたわしゃれ 話をやめて  
話は仕事の邪魔になる  
朝ののら唄 日暮れのやけうた  
昼の日中は仕事うた  
笠を買うなら 深江でかやれ  
馬の足がたこれ名所



絵・杉村清秀氏

●区内のだんじり



中本のだんじり

比賣許曾のだんじり



中道のだんじり





西今里のだんじり



東今里・神路のだんじり

大今里のだんじり



深江のだんじり





区内のだんじり7台勢揃い(東中本公園)

現在、東成区内には7台のだんじりが現存し、いずれも地区の祭礼に曳き出されています。

さて、区内ではいつ頃からだんじりが曳行されたのか、今のところ明確には判明していませんが、現在、城東区諏訪で曳かれている元“中本のだんじり”が最も古く、中本では慶応年間（19世紀中頃）製作と伝えられており、形式から見てもそれがうかがえます。このだんじりの彫師は長谷川市三郎師と伝えられ、江戸時代の寺社関係の彫師であったと思われます。一方、だんじり大工は判明していませんが、旧本庄村に江戸末期から明治後期にかけて活躍した、通称「本庄だんじり屋」と呼ばれるだんじり大工がいたことが知られており、少なくともこのだんじりの製作にかかわりがあったと思われます。このだんじりの製作年代からも分かるように、区内では、江戸時代後期から明治にかけて、各村々で順次だんじりが曳かれ始めたようです。

曳行の様子も昔と今ではかなりの違いがあります。昔は、どこの村でも祭の夜になると男も女も

仮装をして綱を引きながら「だんじりこけても気にしてくれな、後に若い衆がついている。アン・ソレソレ」と色々な文句の曳き歌を歌いながら、夜遅くまで曳いたものです。

鉦と太鼓で賑やかに演じられる、だんじり囃しには、道中（地囃し）と据え置き（へたり囃し）があり、大阪各地には天満台・追い天満・新堀・吉野・八幡流し・本町・北新・今里など地名のついた囃しや、いたち囃し・たぬき囃しなどが多く伝えられています。

しかし、今は昔のように色々な囃しの出来る人も少なくなってきており、各保存会ではそれぞれ独自の囃しを伝承していくことに努めています。

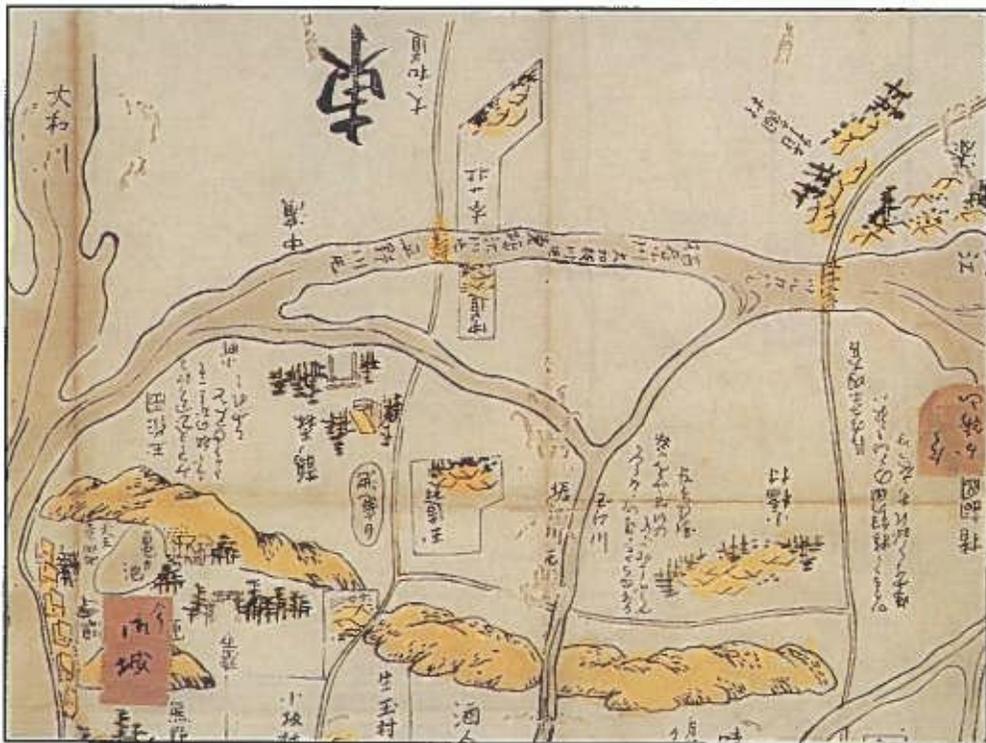
平成元年（1989）8月に開催された大阪市制100周年記念東成区民まつりには、区内7台のだんじりが会場の東中本公園に曳き出され、それぞれけんを競っただんじり囃しが、いやがうえにも祭り気分を盛り上げ区民のコミュニティづくりに大きな役割を果たしました。

# 地図で見る東成の移り変り

## 浪華図



## 浪華往古図

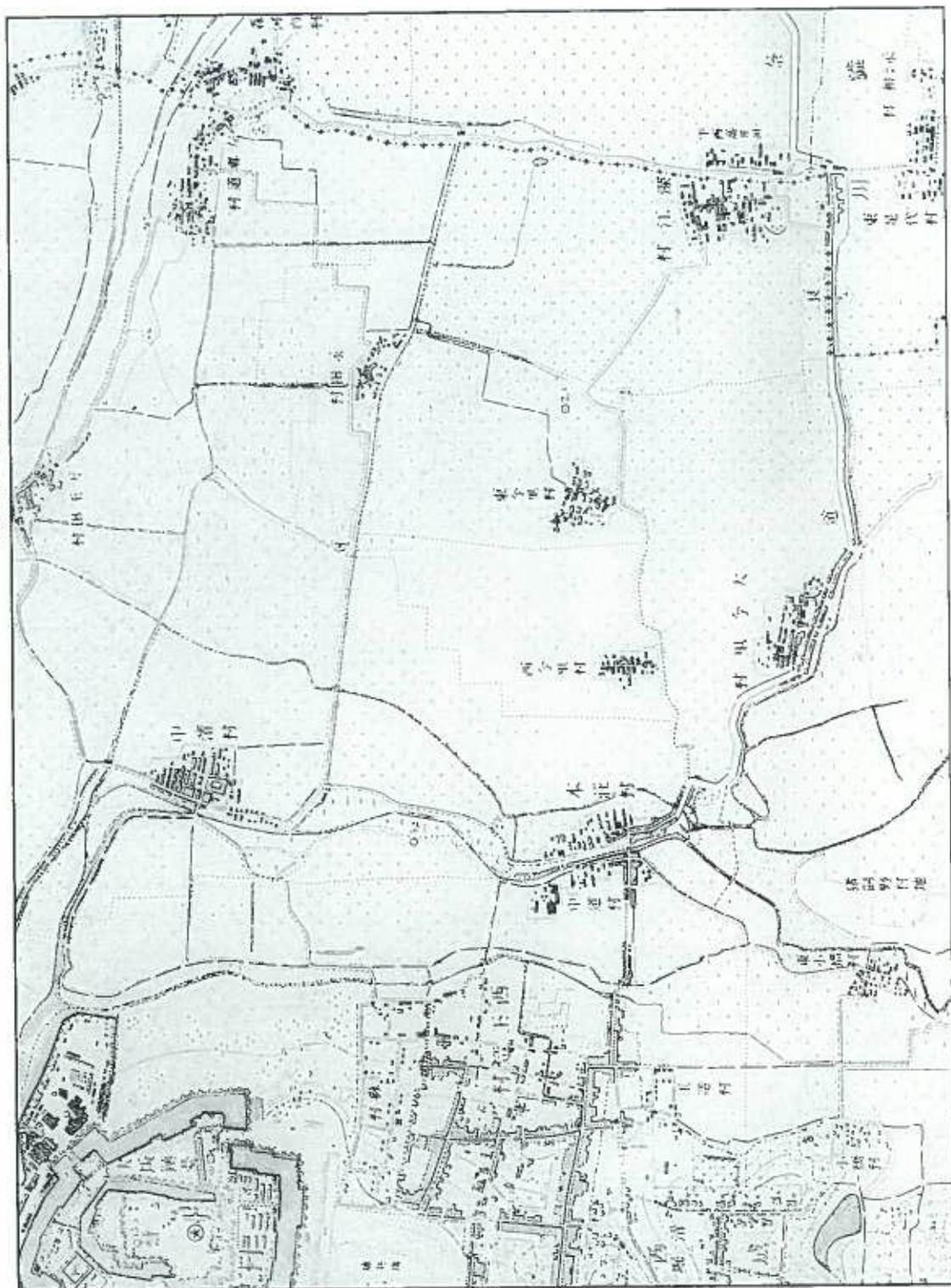


# 撰津河内絵図

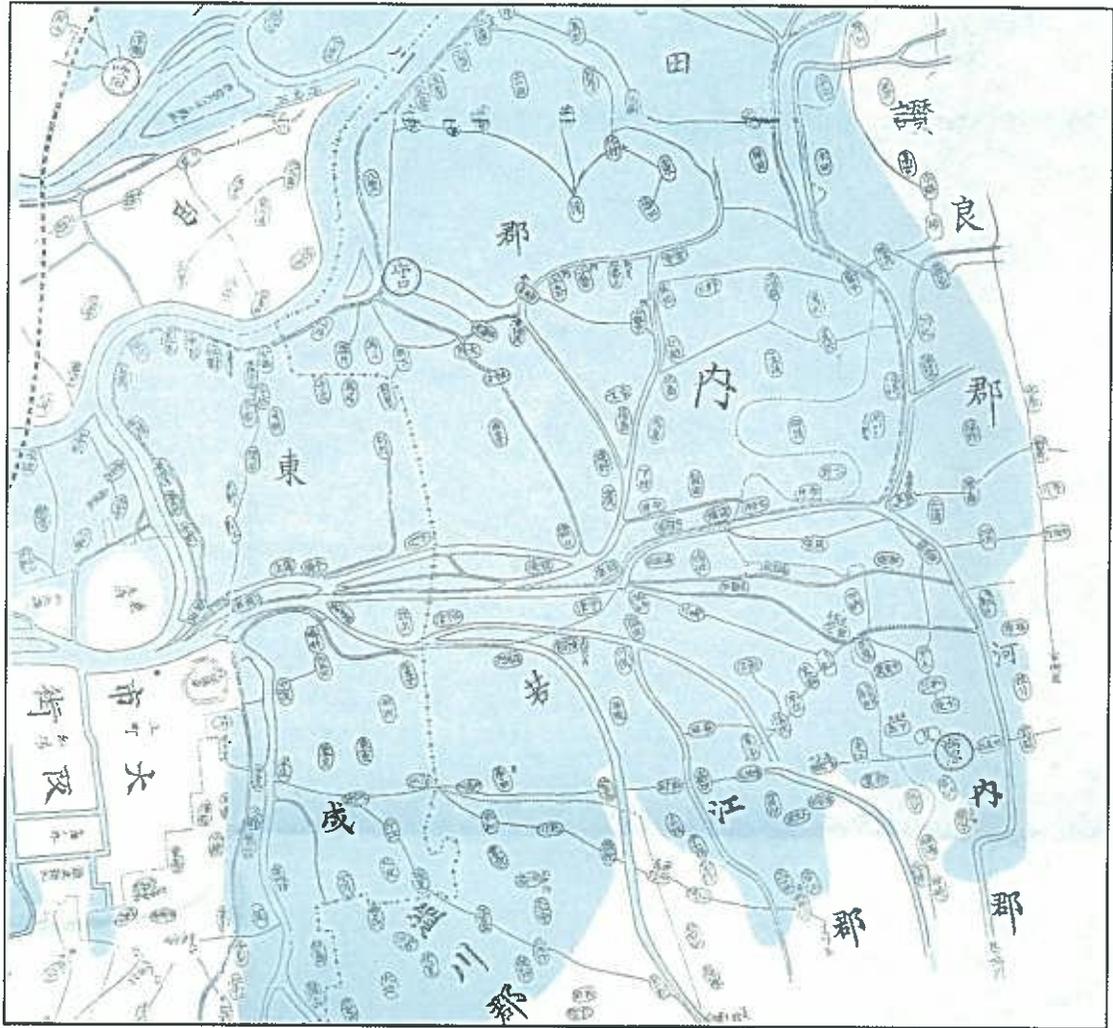


## 明治18年の測量図

■明治の東成は水田の中に村落が点在するのみで、鉄道はまだ敷かれていない。福越奈良街道の道の太さがひととき目立つ。



# 明治18年淀川大洪水浸水区域図



## 淀川左岸右岸両水防事務組合

明治の東成区にとって特筆すべき出来事は淀川堤防決壊による大洪水です。明治18年（1885）6月17日、降り続く大雨のため現在の枚方大橋付近で堤防180mが決壊し、河内平野一帯を泥沼と化し南は生野区及び東大阪市の旧布施地区にまで達しました。その後続く大雨でさらに増水し、高台を除く大阪市内は深さ3mに達する状況に陥りました。

「帝国商工業大都市ノ安危盛衰ノ繁ル所改修ノ業一日モ暖フスヘキニアラス」（紀功碑）と、淀川改修期成同盟が結成されました。熱心な活動の末、明治29年（1896）3月河川法が制定され、淀川の改修工事が始められましたが、こうした中またもや大正6年（1917）に高槻の大塚切れの大洪水があり、苦労は絶えませんでした。

大正・昭和の時代でも台風や高潮の災害が相次ぎ、さきの枚方切れや大塚切れの浸水区域をもって結成された淀川両岸の水害予防組合（水防事務組合の前身）が、区域内の組合員をもって水防団を編成し、農村部のみならず自営商工業者も含むすべての大阪の人々の力を結集して郷土の母なる川、淀川を営々と防衛しながら、その恵みをも享受してきたことは忘れてはなりません。

# 大正10年の測量図

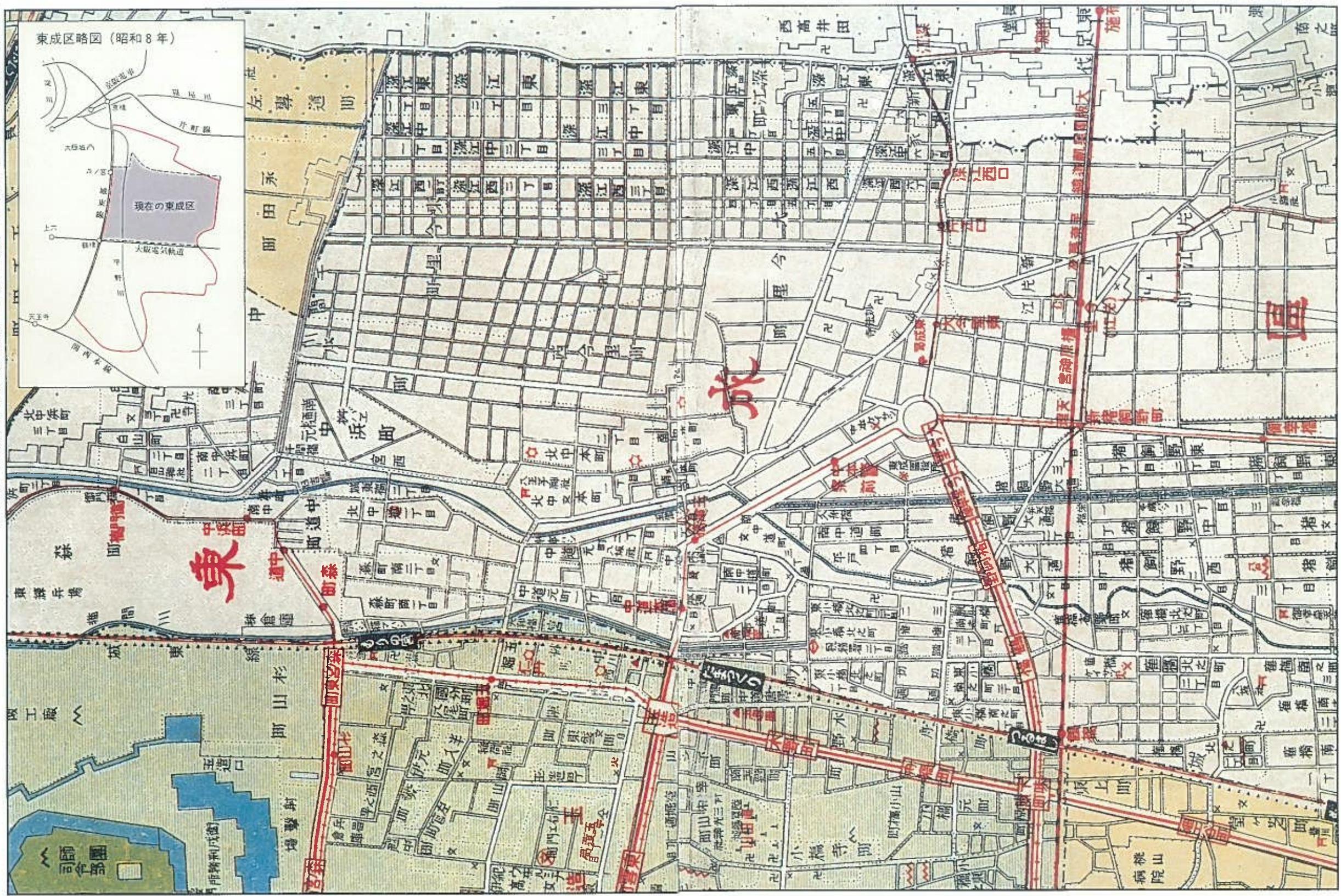
■ 中道、東小橋など西郡で市街地の発達が見られるが、また全体的には水田地帯であった。城東線、大阪電気軌道現在の近鉄はすでに完成し、改修完成間近の、新平野川の区線が際立っている。





# 昭和8年第2次東成区域図

東成区から地区が分区分した頃で「森ノ宮」「鶴橋」「今里」に鉄道の駅が次々と開設され、河内地に移りつつある。今里ロータリーも完成間近で、東成での市街地の発達が始まる。区役所も



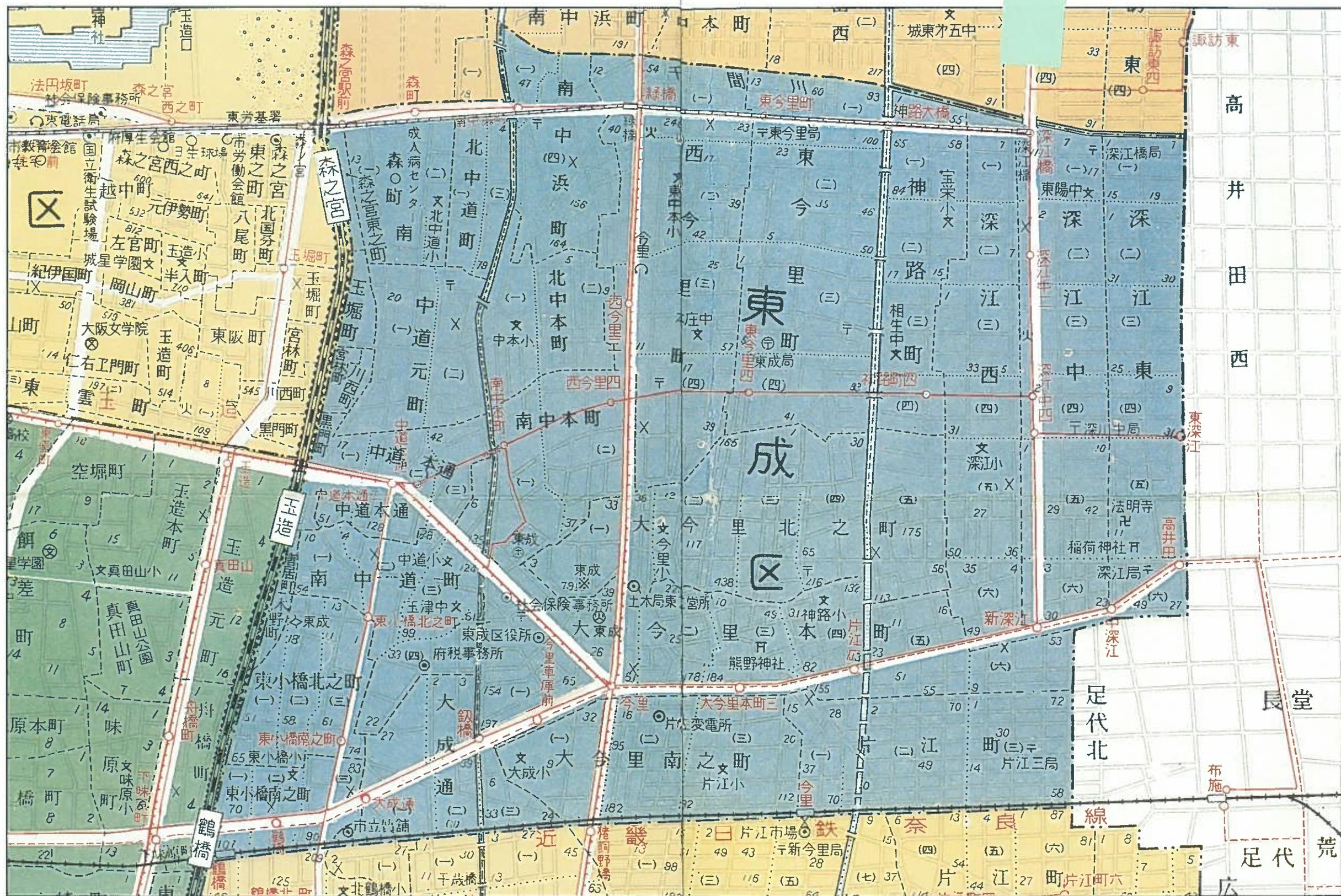
# 昭和21年第3次東成区域図

■戦災焼失区域(リンク)を表示した終戦直後の地図で、破線で示されている市界は通行されていない。東成区は昭和18年より現在の区域になっている。



# 昭和44年東成区域図 (住居表示前)

この地図は市電が全廃された当時のもので、前年には地下鉄中央線(森ノ宮〜深江橋間)が開通している。また住居表示が実施される直前で、なつかしい旧町名がみられる。



# 現在の東成区域図

ひと・こころ・ふれあい

## 東成区マップ



大阪城公園  
広域遊覧場所

森之宮



|           |            |         |
|-----------|------------|---------|
| 市 区 界     | 丁目 界       | その他の公共  |
| 市 界       | コビニティ・センター | 普通郵便局   |
| J R 線     | 緑地公園       | 特定郵便局   |
| 地下鉄(千日前線) | 商店街        | 学 校     |
| 地下鉄(中央線)  | 工 事 中      | 区 役 所   |
| 市 バ ス     | 街区番号       | 消 防 署   |
| 私 鉄       | 主要目標物      | 消 防 分 署 |
| 公園        | 寺 院        | 警 署     |
| 河川水系      | 神社         | 交 差 点   |
|           |            | 休日急病診療所 |

0 100 200 300m

# 空から見た東成



# 大阪のおいたちと 東成のかかわり



大阪夏の陣屏風(部分)

## ●原始時代の大阪とひがしなり

大阪市の地形は非常に平坦で、上町台地と呼ばれる丘陵をのぞけば、ほとんど全域がゼロメートルに近い低地から成っています。東成区域も全般に低地です。『大阪平野発達史』（梶山彦太郎・市原実共著）によれば、今から約7,000～4,000年前、上町台地の東側は生駒山麓まで広大な河内湾が広がっていました。

その後、河内湾は、海面が3メートル余りも低下したのに加え、淀川と大和川の堆積作用によって海岸線がしだいに退き、やがて、河内潟(約3,000～2,000年前)へ、さらに河内湖(約1,800～1,600年前)へと水域が縮小してゆき、しだいに大阪平野が形成されてきたということです。

昭和30年に現在の今大里西1丁目で幅1メートル余りの半円筒型楠材2本を接合した全長6メートル余りの独木舟が出土しました。尾部付近に舟をつなぐための杭が残っていたため、この付近で繫留されていたことが分かり、また、同じ地層から出土した古墳時代末期(6世紀)の特徴を示す土師器などが見つかり、その出土状況からみて遠くから流れてきたものではなく、この地で使用されていたものと判定されました。そのため、すでに6世紀頃には今大里付近にこのような独木舟

と土器を用いる人びとが定住していたことが明らかになったのです。

## ●古代の大阪とひがしなり

第2次大戦後、古代遺跡の発掘が大きく前進、上町台地北部で幻の難波宮の遺構が相次いで発見され、ついに7世紀造営の難波長柄豊碓宮(645年=孝徳朝)と8世紀の聖武朝難波宮の明確な位置と構造が明らかにされました。大化改新で名高い孝徳朝難波宮(前期難波宮)と奈良時代盛期の聖武朝難波宮(後期難波宮)とが、大阪城の南の法円坂で、方位が少し変わるもののほとんど重なり合うような位置で見つかったことから、上町台地が古代の都城造営の立地条件に適していたことがうかがわれ、仁徳朝の高津宮についても、この付近に造営されていたのではないかと推定されるようになってきました。

最近、難波宮跡に隣接する法円坂の中央体育館敷地内で、5世紀後半と推定される大規模な倉庫群の遺構が、16棟も発見され、非常に注目されました。実在年代が5世紀前半といわれている仁徳朝の高津宮と何らかの関わりがあるのかもしれませんが。

このように、上町台地は大阪の歴史の発祥の地といえます。そしてこの丘陵の内外は、往古より難波と呼ばれ、奈良時代初期、和銅6年(713)の郡名改正までは、丘陵の東部を難波大郡、西部を難波小郡と呼んでいました。この年、難波大郡が東生郡に、小郡が西成郡に改称され、東生(ひがしなり)が歴史に登場しました。

## ●中世の大阪とひがしなり

長岡京遷都(784年)とともに難波宮が廃止されてから以後の難波の地は、長岡京に続く平安京の繁栄をよそに、長い間、寒村僻地の状態に陥り、鎌倉時代以降も歴史の表舞台に浮かぶことのないまま数百年の年月が過ぎてゆきました。東成区域についても、14世紀の南北朝動乱期に一時、四天王寺の所領になったことが知られることや、15世紀に深江の菅笠作りが独占的な座を結成して活躍していたことが知られる程度で、詳しいことはよくわかりません。

ところで、大阪(古くは大坂)という地名は、室町時代の明応5年(1596)に、浄土真宗第8世



# 東成の おいたち

## ●地名の起り

私たちの住む郷土「ひがしなり」の地名の起りは、今から約1,300年前の大変古い時代にさかのぼります。

太古の大阪の地形は、現在上町台地と呼ばれている丘陵地帯と、その東西に難波江とか難波瀉と称された入江に、難波の八十島と古歌に読まれた大小の島々が点在する美しい島や入江であったらうと想像されます。このような入江の中にあった往古の当地も、時代が下るに従い、各河川の上流から、永い年月の間にはこびこまれた土砂や、上町台地から落ちる土砂により、次第に陸地化され新しい土地が出来あがったと考えられます。

この丘陵の東部を、古くは“難波大郡”西部を“難波小郡”と称したことが古記録に見えますが、西部の小郡に対し、東部は大郡であり、西よりも東の方が発達していたことを物語っています。

東成区の古代における状態を物語る証拠として、独木舟の出土があります。これは昭和30年(1955)8月、大今里西1丁目の水道局今里営業所裏の下水工事現場から発見されたもので、楠材の長さ約6m、巾約1m程のカマボコ型の独木舟で

す。周辺からは古墳時代の土器も発見され、約1,000年程前のものと言われ、付近一帯には相当早くから集落が存在し、人が住みついていたと思われる。

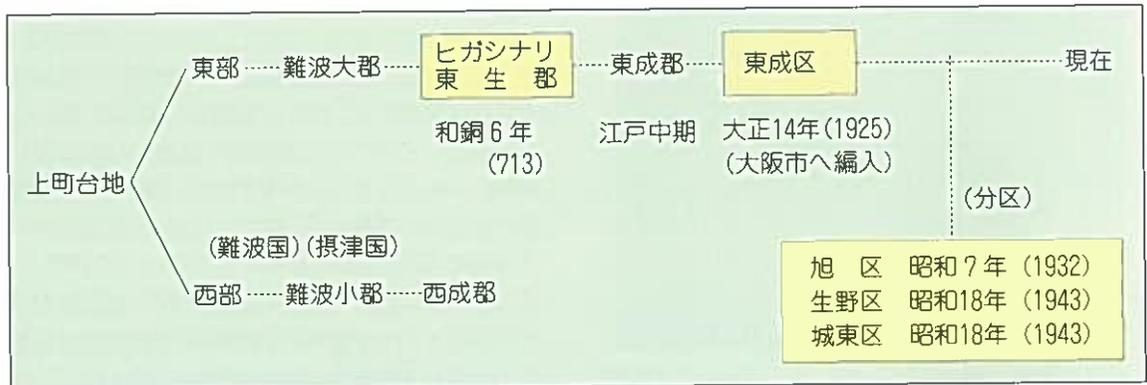
また、昭和41年(1966)8月に地下鉄千日前線の今里駅工事現場からクジラの骨が出土したことから、大昔、当地が入海であったことがうかがわれ、まことに興味深いものがあります。

さて我が国において、郡郷の名称を公式に定めたのは、元明天皇和銅6年(713)であり、「郡郷の名は好字にて、且二字を用うべし」とされ、東部の難波大郡を「東生(ひがしなり)」、西部の難波小郡を「西成」と呼び定められました。この両郡の境界は現在の天王寺区上汐町筋であったと言われています。

この東生の名は上町台地の東に新たに生れた集落というところから、起こったものと考察されます。その後多少の変遷はありましたが、江戸時代中期頃に東成と文字が変わるまで、千余年の間、郡名の呼び名は変ることなく受け継がれてきたのです。

現在の大阪市の大半は、明治初年までは摂津国東成郡と西成郡に属しており、明治22年(1889)に市制町村制が施行され、ここに改めて大阪府「東成郡」が誕生したのです。

私たち東成区民は千年以上に及ぶ歴史的な名称“ひがしなり”を区名として受け継ぎ、浪速大阪の発展とともに栄えてきたことを誇りとし、いつまでも“ひがしなり”を守り育てていきたいものです。



## ●行政の移り変り

当区行政の沿革をたどると、南北朝時代の正平6年(1352)四天王寺秋の坊日記に「新開莊」……云々との記録があり、この新開莊は現在の東成区の大半をしめ、当時は四天王寺の所領であったことが知られます。



東成郡における「新開莊」の位置

「新開莊」の名は文禄3年(1594)、有名な秀吉検地の際に廃止され、江戸時代に入ると当区内の各村は、幕府直轄の天領地となり、大坂城代の知行地または代官支配地となりました。大坂旧市の鈴木町(現国立大阪病院付近)および谷町の2カ所に設けられた代官所が司農行政に当たり、各村々においては、庄屋・年寄・百姓代の村方三役により村々のとりまとめが行われ、明治維新までこの関係が続けられてきました。

江戸時代には当区内に11の村々が存在し、(表1)は江戸時代の行政管轄を表したものです。

明治元年(1868)の廃藩置県により大阪府が誕生し、同5年(1872)に新政府により戸長役場制度が布られました。当区は大阪府第5大区第2小区に編入され、次の(表2)に示すとおり、およそ1万石内外を1小区として区長1名をおき、区長戸長役場が設置され、各村には村用掛を置いて各種行政が行われました。

明治22年(1889)市制町村制が施行され、当区は東成郡役所(四天王寺秋の坊、のち六万体制町)

表1 江戸時代(江戸初年から明治4年まで)

| 村名   | 現校下   | 支配関係  | 石高   |
|------|-------|-------|------|
| 森村   | 北中道   | 徳川代官  | 349石 |
| 中道村  | 中道    | 〃     | 451. |
| 本庄村  | 中本    | 〃     | 805  |
| 西今里村 | } 東中本 | 大阪城代  | 232  |
| 中浜村  |       | 〃     | 532  |
| 深江村  | 深江    | 京都所司代 | 766  |
| 東今里村 | 宝栄    | 大阪城代  | 456  |
| 大今里村 | 今里・神路 | 徳川代官  | 980  |
| 東小橋村 | 東小橋   | 〃     | 107  |
| 片江村  | 片江    | 大阪城代  | 456  |
| 猪飼野村 | 大成    | 〃     |      |

(注) 現校下は旧村におよそあてはめたもの

表2 戸長役場制度(明治5年から明治21年まで)  
大阪府第5大区第2小区

| 番組  | 編成村名<br>(当区関係村のみ) |
|-----|-------------------|
| 一番組 | 猪飼野村              |
| 二〃  | 東小橋村              |
| 五〃  | 森村 中道村            |
| 六〃  | 本庄村 西今里村          |
| 八〃  | 深江村 東今里村          |
| 九〃  | 片江村 大今里村          |

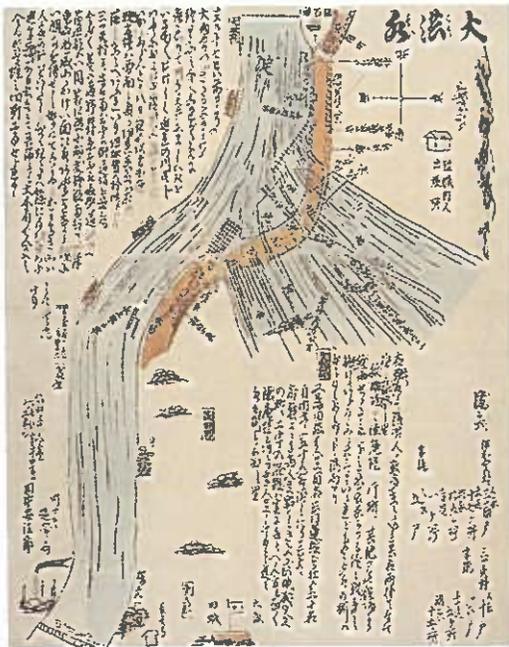
表3 合併新村(明治21年から大正14年まで)

| 新村名   | 合併村名(当区関係村のみ)   |
|-------|-----------------|
| 鶴橋村   | 東小橋村 猪飼野村       |
| 中本村   | 本庄村 中道村 西今里村 森村 |
| 南新開莊村 | 東今里村 大今里村 深江村   |
| 小路村   | 片江村             |

の所轄下に次の(表3)のとおり合併村となり、新村名で発足しました。

その後、大正元年(1912)には中本村が町制を布き、同5年(1916)には南新開莊村が神路村と改称され、同14年(1925)に大阪市に編入されて東成区となりました。当時の区域は広大でしたが、その後、昭和7年(1932)に旭区が、また同18年(1943)に生野区・城東区がそれぞれ分区し現在に至っています。

## ●明治のひがしなり



淀川大洪水を伝える当時の号外

江戸幕府体制が崩壊し明治新政府となりましたが、慶応から明治初年頃までは、“朝令暮改”といわれたごとく、諸制度の改革は実に頻繁でした。

明治元年（1868）に大阪府が設置され、その管轄下での明治5年（1872）の戸長役場制度や、同22年（1889）の市町村制の施行などの行政の変遷については、行政の移り変りで述べたとおりです。

さて明治期前半の当区は、区内を南北に流れる平野川・猫商川などの河川により、水利の便に恵まれ、主に綿・米・麦・菜種などを栽培する農村が点在するのどかな田園地帯でした。

明治12年（1879）大阪造兵工廠、明治23年（1890）城東練兵場が設置され、また、中期頃に西部の一部が大阪市に編入されるなどの影響により中本村（現、北中道・中道・中本の校下）方面は住宅地や家内工業地となり、市街地に隣接する鶴橋方面は商工業が目立ち始めるなど、漸次西部から開発が進みました。しかし、明治時代の当区はまだ農業が主であり、水利問題、水害予防は各村政の重要な課題でもありました。明治2年（1869）に五千石堤防水害予防組合（後の淀川左岸水害予防組

合）が設立され、以後の水防行政に重要な役割を果たすこととなります。

明治期の中で当区の最も大きな出来事は、明治18年（1885）の淀川大洪水による悲惨な被害です。この大洪水は、6月中旬から7月初旬にかけて大雨が降り続き、6月17日枚方付近で淀川堤が決壊し、遂に7月2日早朝から空前の大洪水となりました。北河内・中河内を始め、東成・西成郡一帯は一夜にして大湖水が出現し泥海と化したと記録されています。当区内の浸水水位は4 mにも達し、今なお区内旧家の土蔵にその痕が残り、当時のものすごさを物語っています。

当時の西今里村では、大今里1丁目にある通称楠神社（八王子神社お旅所）の楠の大樹（樹齢1,200年）に、村人四十数人が登り、数日後に救助船に救出され、かろうじて難をのがれたということです。

また区内の家屋の流失や、田畑の冠水、死者・行方不明者など被害はおびただしいもので、想像を絶する惨状であったと語り継がれています。

このような大被害から淀川改修の議が起り、明治30年（1897）に改修工事が着工され、千数百万円の巨費（当時）と10年余りの歳月を費やして、同42年（1909）にさしもの大工事も完成をみるに至ります。毛馬の閘門を設け、新淀川を開き、現在の大川（旧淀川）の主流を、十三で旧中津川などと合流する流れに変えることにより、以後、淀川からの大洪水の心配がなくなりました。

一方、学校教育をみますと、早くも明治15年（1882）に阪東小学校（神路小の前身）、同20年（1887）には東生尋常小学校（中本小の前身）がそれぞれ創立されています。

また交通機関も、明治28年（1895）に城東線（現在のJR環状線）が民営鉄道として開通し、玉造駅が設置されるに伴い当区の地域発展と住民に多大の便を供してくれました。

## ●大正のひがしなり

明治22年（1889）に大阪市制施行、同30年（1897）に第1次市域拡張がなされます。

この時、当時の鶴橋村と中本村の一部が大阪市

に編入されますが、これら両村は西部が市域と隣接する関係から、他の区域にさきかけて以後の発展をみることとなります。

大正期に入りますと、元年（1912）10月に鶴橋・中本の両村は町制を布くこととなります。

また、従来の農村もしたいに住宅地に転換され、地価の高騰に伴い土地開発会社の創立をみるに至る状態で、かつてはのどかな農村地帯であった当区も、著しい発展の途をたどりました。

大正3年（1914）に大軌電車（現近鉄）が開通し、鶴橋、深江（現布施）両駅が新設され、明治28年（1895）開通の城東線（現環状線）と共に交通機関の便に恵まれたこともあって、自然に人口の増加をみるに至りました。明治42年（1909）の当区域内の人口は約1万7千人でしたが、大正13年（1924）には10万人を越す勢いとなり、各町村の行政も多事にわたりました。

人口の増加に伴い、大正4年に中本第2（現中道小）、同11年（1922）に鶴橋第3（現大成小）、中本第4（現北中道小）の各尋常小学校が次々と新設開校されます。

商工業の発展と人口増加により都市化へと変貌する中、道路も次第に整備され、上下水道なども各町村毎に漸次整備拡張され、大阪市に編入される条件を名実ともにかね備える状況となります。

いよいよ大正14年（1925）4月、大阪市第2次市域拡張により正式に大阪市に編入され「東成区」として発足することになりました。

ここにおいて1千年以上の歴史ある東成郡に終止符をうち、商業都市大大阪の一行政区として、伝統ある東成の名称をそのまま区名に冠しての第一歩を踏み出しました。

この「東成区」は、中本・鶴橋・鯉江・榎並の各町、神路・小路・生野・城東・榎本・城北・古市・清水の各村との4町8ヵ村で編成され、初代区長には、当時の郡長であった木下貞太郎氏が就任しました。

当時人口は23万人強と多く又地域も極めて広大であったため、区役所を旧鶴橋町役場に、第1出張所を今福に、第2出張所を千林にそれぞれ設置し、区行政がスタートしました。

THE OSARA MARCHING SHIMBUN 日一月四年十四正大 (可読物製郵種三等郵便) (四日)

# 大阪毎日新聞

第四十共刊夕紙本

## 輝かしい「大大阪市」は 愈々けふから實現

面積は東京の二倍、人口は世界第六位、これを築き上げた市民の「金」と「人」の力

### 新に施行される事業の大観

一 幹線道路の一新  
一 聯絡を急務

#### 各區の面積

人口並に戸數調べ

一 生産の都としての 大人反を築きたい



大阪市第2次市域拡張(東成区発足)を伝える当時の新聞記事

## ●昭和のひがしなり (終戦まで)

昭和5年建設の区役所旧庁舎



昭和に入りますといろいろな面で一層都市化が進み、更に発展の一途をたどります。区勢の伸長に伴い区画整理が行われ、上下水道や公園などの公共施設がより整備拡張されます。昭和5年(1930)には区役所庁舎が発足当初の旧鶴橋町役場から現在地に新築移転します。

昭和初期の東成区は、現在の生野・旭・城東・鶴見の4区をも含む広大な区域を有し、人口も33万人を数える大区であり、区政は複雑繁忙を極めます。

そのために昭和7年(1932)10月、当時の第1・2出張所の区域を「旭区」しとして分区するに至りました。その後も区勢はますます発展し、同18年(1943)に再び、「生野区」・「城東区」が分区しました。当区は大阪市に編入当初から、地理的にも中心的存在であったこともあり、1,300年の歴史的な“ひがしなり”の名称を受け継ぎ今日に至っています。

「生野区」・「城東区」の分区後は面積は約4.5km<sup>2</sup>、当時22区中18位という大変狭い区域となり、人口密度はきわめて高い状態でした。

さて、昭和という時代は、大阪市が飛躍的に発展した時期です。昭和の御大典を記念して、大阪

のシンボルとも言うべき大阪城が、市民の浄財をもって見事に完成し、御堂筋を始めとした近代的道路網の整備や地下鉄の開通というような、近代都市の機能の充実がなされ、名実共に日本の代表的な一大商業都市へと発展します。

これまでの当区の交通機関は、西の城東線(環状線)と南の大軌(現近鉄線)だけでしたが、このような大阪市の発展に伴い、昭和2年(1927)に市電が下味原から今里まで延長開通し、城東線も高架化・電化がなされ、同8年(1933)には「森の宮」・「鶴橋」両駅の開業と共に、区民の足は飛躍的に便利となりました。

小学校も、東小橋・今里・東中本・深江・片江と次々に新設され、戦後の宝栄小学校新設により今日の11校となります。

また、各種公共社会事業施設の充実や、工業化の発展とともに大阪市の東部をしめる重要な位置として繁栄の道を歩みます。

しかし、昭和9年(1934)9月21日、大阪方面を襲った室戸台風は、北中道・中道・神路・中本の各小学校の校舎をなぎ倒し、教員、児童に痛ましい犠牲者を出すという、悲惨な爪痕を残しましたが、これを機に校舎も漸次鉄筋コンクリート造りに生まれ変わるようになりました。

戦前から東成区は、中小の企業が多く、大阪市東部に於ける工業地帯を形成し、鉄工・繊維を中心として画期的な発展をとげてきました。

昭和12年(1937)頃より戦時体制が強化される中、各校下毎に町会、隣組の組織が結成され、さらに戦況が激しさを加えるにつれて区民の生活も圧迫されることとなります。

昭和20年(1945)3月13日夜の大阪大空襲を皮切りに、区内のあちこちが爆撃で罹災し、殊に同年6月15日の空襲はすさまじく、6,363戸の全焼家屋と20,699人の罹災者を出すに至りました。これら被災地の多くは、当区の西部に集中していました。

戦後、区民はあらゆる苦難から立ち上がり、東成区復興の力強い槌音を響かせ、明るい住みよい町づくりに、力を合わせながら歩み出したのです。

# ふるさとの 史 跡

## ● 暗越奈良街道にそって

区内をほぼ東西に走る旧街道として、江戸時代から有名であった暗越奈良街道は、いつ頃から開けた道が詳しくはわかりませんが、およそ4～500年前から、摂津・河内・大和の村落を結ぶ重要な道として既に開発されていたことが大坂冬の陣の各大名軍団配置図によってもそれを知ることができます。

この暗越奈良街道が開けていなかったその昔、難波から大和へ行くには、日本最古の国道といわれる竹内街道が利用され、また、日下の直越なども万葉集にみられます。この暗越奈良街道は、生駒山の暗峠を越えて奈良に至る最短コースであったところからその名が起りました。

大阪高麗橋を起点として旧市内から玉造へ、更に玉津橋を渡り右手にくねくねと曲がりながら東成警察署前～大今里～深江～河内を経て奈良に入ったのです。江戸中期からお伊勢参りが全国的に盛んとなり、この道はこれらの旅人で溢れんばかりに賑わったことが想像できます。

この街道沿いの名所旧跡にスポットをあててみましょう。

まず西から二軒茶屋と石橋があります。春の訪れとともに他国からの伊勢参りの旅人は、淀川の八軒家（現松坂屋南）で船から降り、1泊したのち朝一番発ちで、内安堂寺橋筋から玉造に着きます。当時の玉造は旧市街のはずれで、旅人はここで旅装を整え、家族友人らの見送りを受けて、ヤットコセー、ヨーイヤーと賑やかに伊勢音頭を唄いながら東へ向かったもので、これら旅人たちの休息所として、鶴屋・柳屋という二軒の茶屋があったところから二軒茶屋の名称が生まれました。

ちょうど二軒茶屋の傍らを流れる猫間川には、慶安3年（1650）幕命により架けられた大坂市中



二軒茶屋・石橋旧跡碑

では最初の石造橋があり、正式には黒門橋と呼ばれていました。この二軒茶屋・石橋は、古典落語にも登場し、広く世に知れわたりました。

現在玉造駅東の路上に玉造名所・二軒茶屋石橋旧跡の碑が建っており、大阪市の顕彰史跡に指定されています。黒門橋は、その昔大坂城の玉造門がこの付近にあり、それが黒かったことから黒門の名がつけられたとのことで、この黒門は天王寺の一心寺の寺門として移築されたと伝えられています。

さて、二軒茶屋を出発した旅人は、中道村を通って平野川に架かる玉津橋を渡って本庄村に入り、大今里から深江に入ったのですが、この平野川は大変古い川で、別名百濟川とも呼ばれ、しばしば古歌にもよまれています。

現在、中道の八阪神社南鳥居入口に暗越奈良街道距高麗橋元標考里の道標が建っています。これは高麗橋の元標からここが1里（約4 km）にあたることを示しています。

江戸時代の玉津橋付近では、馬をつないで道行く旅人に「馬に乗ってくださいませ」とすすめたと伝えられています。明治末期から大正時代には、この街道に路線馬車が通い、のどかな河内平野を瓢箪山まで往復していました。

「暗越奈良街道距離標」の道標



大今里西1丁目の街道の曲がり角に常善寺左へ三丁と記された道標があります。これは江戸時代に大阪の芝居興業と深いかかわりをもつ西今里村の常善寺への道が示されたものです。

東成警察署前の旧街道を曲がりくねりながら大今里村に入ると旧街道の面影をよくとどめています。この旧大今里村の氏神熊野大神宮の隣にある妙法寺は、近世国学の祖といわれる契沖が、延宝7年(1679)から元禄3年(1690)までの11年間住職として滞在し、また修学の道場として有名であり、昭和24年に大阪府顕彰史跡に指定されました。契沖は在寺中に水戸光圀公の懇嘆により、有名な「萬葉代匠記・総釈」の大著をはじめ、多くの著作を残されましたが、元禄3年1月に母堂を亡くされると、天王寺区の円珠庵に隠棲し、同14年(1701)1月25日、62歳の生涯を終えました。現在、妙法寺境内に契沖阿闍梨供養塔と、契沖慈母の墓が残っています。

旧街道と枚岡線の交差するところに左いせ・ならと記された、上部を4角にくりぬいて尖袋とし、上に笠を乗せた珍しい形の道標があります。文化3年(1806)に建てられ、夜間明かりを入れて旅人の便をはかったものです。

“大坂はなれてはや玉造、笠を買うなら深江が名所、ヤットコセー、ヨーイヤナー”と伊勢音頭に歌われ、広く世に知られた名産深江の菅笠は、近世、伊勢参りが盛んになり、この道路が賑わいをみせて以来、参宮の旅人が皆ここで菅笠を道中用に買い求め、必ず携帯する習慣となりました。そのむかし、笠縫氏という一族が、大和笠縫邑から笠の材料である菅が難波入江の沼沢に多く繁茂するところから、集団移住したと伝えられ、古歌にうたわれている笠縫島は、この深江付近と伝えられています。万葉集に「押し照るや難波菅笠置きふるし、後は誰か着ん笠ならなくに」「四極山うち越しみれば笠縫の、島こぎかくる棚なし小舟」とよまれています。

菅笠は、歴代天皇のご即位式や伊勢神宮の20年に1度の式年遷宮に献納されるのを例とし、直径2mにもおよぶ大菅笠が調製され、その技術を地元の方々により保存伝承され今日に至っています。深江稻荷神社一帯が、「笠縫邑跡」として大

「常善寺左へ三丁」と記された道標



契沖史跡・妙法寺



旧街道の面影(大今里3丁目)



契沖阿闍梨供養塔



笠を乗せた珍しい形の道標(笠とろうす)



「深江菅笠ゆかりの地」と「笠縫邑跡」碑

版府の史跡に、また、「深江菅笠ゆかりの地」として大阪市史跡に指定されています。

この稻荷神社の西側に法明寺ほうめいじがあります。境内に雁塚かりづかと呼ばれる2基の石塔があり、1基は弘長2年（1262）他の1基は延元4年（1339）と記された石塔です。この石塔には、次のような伝説があります。

「その昔、清原行部丞正次きよはらのゆきべのちやうまさだという弓の名手がある冬の日にかまを伴って狩りに出かけましたが、その日は1羽も獲物がとれません。夕方、帰りがけに一群の雁にであったので、先頭の1羽を射落としました。すると、どうしたことがその雁の頭がありません。その周辺を探しましたが見つからず、そのまま帰りました。次の冬に狩りに出て1羽の雌の雁を射ち落としました。すると不思議なことに、羽の下から乾いた雄の雁の頭が出てきました。」この話を聞かされた徳の高い法明上人ほうめいじゆうじんは、雁の夫婦愛にうたれ、その冥福を祈るために四重の石塔を建立されたのが「雁塚」であると伝えられています。

この法明寺への道しるべとして、旧深江の新家という所のお地蔵さんに江戸時代の道標が建っています。



法明寺の「雁塚」



法明寺への道標

## ●平野川と玉津橋

東成区の歴史文化を語るとき、東西に走る暗越奈良街道とともに南北に流れる平野川・猫間川の歴史を忘れることはできません。街道は大坂の東の玄関口玉造の二軒茶屋を起点として猫間川に架かる黒門橋（通称石橋）を渡り、しばらく行くと玉津橋に至り平野川を渡ることになります。

黒門橋は大正13年(1924)に撤去され、猫間川も埋立てられて今ではその面影を見ることはできません。

平野川と暗越奈良街道とが交差する玉津橋は、交通の要所として賑わっていました。

「津」と言う字は、港を意味しますが、船着場もあり、玉造の港ということから玉津橋の名称が生まれたのではないかと考えられます。玉津橋は昭和61年(1986)12月に架け替えられ、歴史の橋として江戸時代の絵地図「増修改正摂州大坂地図＝文化2年(1805)」をエッチングしたパネル6枚が欄干に取り付けられ、歩道部分も暗峠につながる雰囲気を出すために石畳風に仕上げられています。

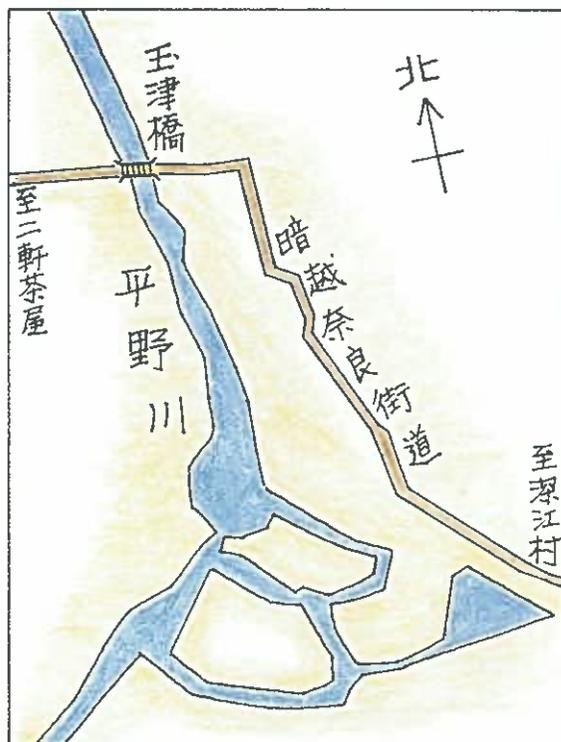
平野川は、寛永13年(1626)頃から、柏原舟が河内の柏原と大坂の八軒家の間を輸送水路として

利用し、最盛期には70艘の柏原舟が上り下りしたと言われています。一方、大坂市中は、運河の開削や河川の整備が行われ、水運が発達し、「人云う、天下の貨七分は浪華にあり、浪華の貨七分は舟中にあり」と言われるほどで、輸送の主役は上荷舟・茶舟で営業権を独占していました。当時、柏原舟と上荷舟・茶舟との間に水運の競合が激しく、紛争や訴訟が絶えず、柏原舟仲間は中道村に番所を設け、荷物の量などを記録し、訴訟に対応したという記録もあります。

かつての平野川は生野区の「俊徳橋」北辺から東成区の「中本橋」までは極めて曲折して流れ、しばしば氾濫の元になったので大正12年(1923)に直線に改修され、現在の流れに変わりました。

平野川は、奈良朝より平安朝にかけて百済郡が置かれ、その中央を流れていたことから、古名「百済川」と呼ばれていました。また、猫間川の名称の由来についても、一説には百済川に対して高麗川と呼ばれていたのが、訛って猫間川と呼ばれるようになったと言われています。

古代の大坂は、渡来文化の窓口としての役割を果たしながら発展してきました。



明治19年の玉津橋付近図



玉津橋

## ●平野川周辺の旧跡

平野川の上流である現在の生野区桃谷3丁目付近に鶴の橋跡の碑が建っています。日本書紀に「仁徳天皇14年(323年)11月橋を猪飼津に造り、即ち其処を号けて小橋と曰う」と記され、文献上では日本最古の橋といえます。この地方にはたくさん鶴が群生していましたので鶴の橋と呼ばれるようになり、この橋の下流の現東成区東小橋3丁目のところに亀の橋跡の碑が建っています。これは後世、鶴に対して縁起のよい亀が名付けられたものと想像されます。



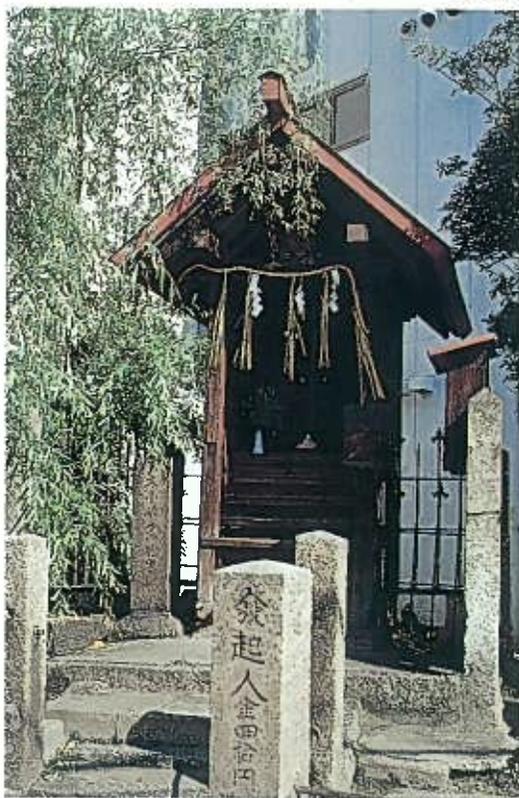
亀の橋の碑

また同じ東小橋3丁目に胸衣塚と呼ばれる塚があります。垂仁天皇2年(前28年)に創建されたとされる比賣許曾神社にまつられている大小橋命の胸衣を納めた塚と伝えられています。後世この塚に植えられた柳の枝が、子供の夜泣き封じに効果があると伝承され、いつのまにかよな塚と呼ばれ、広く世に知られるようになりました。



鶴の橋の碑

胸衣塚



## ●区内の社寺

区内には神社寺院がたくさんあり、それぞれの由緒をもち地域住民に古くから親しまれてきました。ここで江戸時代以前創建のものについて簡単に紹介します。

### ひめこそじんしゃ 比賣許曾神社 = 東小橋3丁目

したてる ひめのみこと  
下照比賣命ほか四柱を奉齋する延喜式内名神大社で、垂仁天皇2年愛久目山に下照比賣命を祀ったのを起源とするたいへん古い社で、推古天皇15年(607)正遷宮の際に天皇の行幸があり、貞観元年(859)神階を従四位に進められた歴史的にも有名な神社です。石山合戦の兵火にあい現在地に移り、旧小橋村の氏神で、多数の文化財を有し、浪速文化の消息を知る貴重なものがあります。

### やさかじんしゃ 八阪神社 = 中道4丁目

すさのみこと  
素戔鳴尊ほか一柱を奉齋する旧中道村の氏神で、藤原道長がこの地に別業(別邸)を設け祀っていたのを、仁安元年(1166)里人が社殿を再興し、天正12年(1584)現在地に移転したと伝え、もと牛頭天王白山権現と称しましたが、明治5年(1872)八阪神社と改称しました。

### はちおうじじんしゃ 八王子神社 = 中本4丁目

はちおうじ おおかみ  
八王子大神ほか四柱を奉齋する旧本庄村の氏神で、応神天皇3年(273)の創建と伝え、孝徳天皇より高麗狗一対の献納があったと伝えられ、八王子稲荷社として、また“樁の宮”として知られました。明治5年(1872)百濟神社と改称、明治42年(1909)旧西今里村の氏神八剣神社を合祀し八王子神社と改めました。

### くまの だいじんぐう 熊野大神宮 = 大今里4丁目

いざなりのみこと  
伊弉册尊ほか二柱を奉齋する旧大今里村の氏神で、用明天皇2年(586)の創建と伝えられます。石山合戦の際、兵火にあいましたが再建され、元和(17世紀前期)以降大坂城代就任と領内巡視の時は、必ず社参することを恒例とした社で、熊野権現と称し、明治5年(1872)に現社号に改め、同44年(1911)旧東今里村氏神八剣神社を合祀しました。

### ふかえいなりにじんしゃ 深江稲荷神社 = 深江南3丁目

うがのみたまのかみ  
宇賀御魂神ほか二柱を奉齋する旧深江村の氏神で、和銅年間(8世紀前期)の創建といわれ、慶長8年(1603)豊臣秀頼が社殿を改造したとも伝えられます。笠縫部との関係が深く、現在境内が「笠縫邑跡」「深江菅笠ゆかりの地」として大阪府、市から史跡に指定されています。

### みょうほうじ 妙法寺(真言宗御室派) = 大今里4丁目

聖徳太子の創建と伝えられ、近世国学の祖と言われる契沖が、延宝7年(1679)から元禄3年(1690)まで住職をし、また、修学の道場としても有名で、現在大阪府顕彰史跡に指定されています。

### ほうみょうじ 法明寺(浄土宗) = 深江南3丁目

ぶんぽう 2 年 (1318) 融通大念仏宗の中興の祖、法明上人の開基で、境内に「雁塚」と呼ばれる二基の石塔があるので有名です。

大今里にある良念寺は天明2年(1782)、観光寺は永徳年間(14世紀後期)、西蓮寺は元禄5年(1692)に創建された融通大念仏宗のお寺です。浄土真宗本願寺派の深江の眞行寺は慶安2年(1649)、東小橋の安楽寺は正徳年間(18世紀前期)の再興です。大谷派の中本の誓立寺は慶長年間(16世紀末～17世紀始め)、中道の浄琳寺は天文5年(1536)の創建、大今里西の常善寺は本門法華宗で、寛延元年(1748)の創建です。

# ふるさとの 文化財

大今里西で発掘された独木舟



## ○大今里西で発掘された<sup>まるきぶね</sup>独木舟

昭和30年、現在の大今里西1丁目で発掘されたもので、出たときの様子からみて遠くから流されて来たものではなく、ここで<sup>くわ</sup>杭につながれたまま使われなくなってしまったものと考えられます。

ここからは独木舟と同時に古墳時代末頃の土器も出ていますので、恐らくこの頃にはかなりの人々が住み始め、集落もでき、魚なども取って暮らしていたものと思われる。

丸木舟は東成区民第一号が乗ったものと言って良いもので、現在は大阪城天守閣に大切に保管されています。

## ○<sup>あけもんさんぞくこうろ</sup>葵紋三足香炉 江戸時代

妙法寺に伝わる大型の香炉、仏前において香を<sup>た</sup>薫くための道具。白い京焼系統の作で正面に三葉葵の紋をつけ、この部分には青いうわぐすり<sup>うわぐすり</sup>が掛けられています。

妙法寺の住職であった<sup>はいちゆう</sup>契沖が、万葉集の注釈書である「<sup>まんようだいしゆう</sup>万葉代匠記」を書きあげ、水戸光圀に差し出したところ、多額のお金とこの香炉が贈られました。契沖はお金はすべて貧しい人々に分けあたえ、寺には香炉だけが残っています。



大今里でみつかったクジラの骨

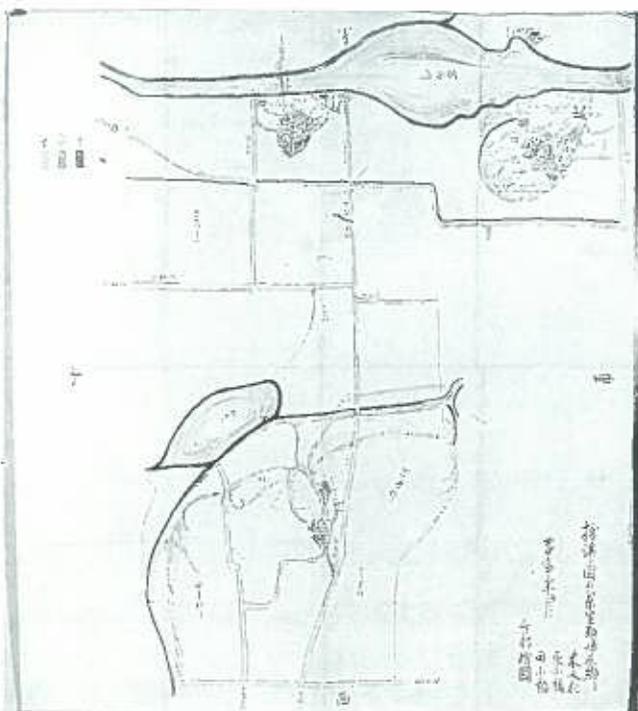
## ○大今里でみつかったクジラの骨

およそ1,600年ほど前の大阪湾は大阪平野に大きく入込んでおり、東成区の大半は入江になっていました。今でも大阪平野の所々で海の証拠となる貝の化石なども発見されています。これは地下鉄千日前線の工事中に発見されたミンククジラの骨で、現在は長居の市立自然史博物館に展示されています。



葵紋三足香炉

摂津国欠東生郡味原郷三村絵図



○摂津国欠東生郡味原郷三村絵図

比賣許曾神社には室町末期から江戸初期にかけての文書や絵図が保存されており、これもその一つ。ただし、慶長年間につくられたものを江戸時代の中頃にもう一度書き写したものと考えられます。東小橋・西小橋・木之村の三村の位置関係や村の社の様子などがわかりますが、百濟川をはじめとする川や池を重点的に記しているため、この地域の水利や治水のために記されたものと思われる。

なお、欠郡というのは旧百濟郡の中世までの俗称で、ここは近世になって東生・住吉の両郡に編入されています。

○曳馬図絵馬

八王子神社の絵馬。日本人は古くから神様は馬に乗って天から降りて来るものと考えていました。したがって、祭りには神馬が献上され、神馬を飼う神社も多かったのです。しかし時代が下るとこの習慣が簡略化され、絵に書いた馬を奉納する風習となり、絵馬のはじまりとなりました。

八王子神社の曳馬図絵馬は立派なケヤキの板に書かれ、画家は不明ですが、筆づかいもしっかりしており、江戸末期の絵馬としては優れた作品の一つにあげられます。

曳馬図絵馬



# 東成区を横切る 暗越奈良街道

## ●道の果たした役割

### — 暗越奈良街道 —

道というのは人と人、人とその作業場、あるいは村と村、町と町を一定の線で結びつけるものです。道は人の歴史とともにあって、その時代や地域の人々と深いかかわりをもっています。東成区のほぼ中央を東西に横切る「暗越奈良街道」も、古い昔から瀬戸内海に面する大阪と内陸部の奈良を結ぶ最も近い道として、近畿地方の政治・経済だけでなく文化の交流発展にも大きな役割を果たしていました。

これをもう少し広い立場、全国における大阪の地理的位置づけという点から見てみましょう。

古代では、現代の大阪にその殆どが含まれる摂河泉（摂津・河内・和泉）は大国として扱われ、山城（京都府）、大和（奈良県）とともに畿内に入れられ、摂津には難波高津宮、難波長柄豊碇宮、聖武天皇の難波宮なども定められていました。摂河泉の地はそれぞれの面積は小さいのですが、古代政権にとっては、大事な地域であり、また当時としては生産力の最先進地域であったのです。

古代の摂河泉がこのように発展してきたのには地理的な理由があります。現在の大阪平野は西に大阪湾を抱き、北は六甲・北摂の山々、東は生駒金剛山地、南は和泉山脈によって囲まれた近畿地方最大の平野になっています。しかし大阪の地形は何千年も前から現在と同じような状態であったわけではありません。4～5千年も昔には大阪湾はずっと広く、今の堺筋が西の海岸線であったし、JR天満駅の付近から東は入江となって生駒山の山裾近くまで波が打ち寄せていました。上町台地は大阪湾に突き出した半島のような形をみせていたのです。それが長い間に、台地の東側は淀川や大和川の運んでくる土や砂利で、西側は海流による砂の堆積で新しい土地が生まれ、このあた

りが古代技術による農地開拓に最適の場所となってきました。

しかもここは日本と大陸を結ぶ交通ルートであった瀬戸内海の東の突き当たりであり、大陸の先進的な技術と文化を真っ先に取り入れることのできた土地でもありました。4～5世紀ごろには大陸・北九州・瀬戸内・大阪湾という海路が賑やかになり、上町台地とその周辺は先進文化の受け入れ口として発展して行きましたが、このころになると東の大和盆地にいわゆる大和朝廷が成立し、大阪と奈良を結ぶ陸路も整備されてきました。7世紀の初め、推古天皇の時には上町台地を南へ下り二上山麓をへて飛鳥地方へ通じる竹内街道がメインルートとされ、都が奈良盆地の南の飛鳥から北の平城宮にかわると、今度は最短コースである暗峠や日下峠や十三峠など生駒山地を越えるいくつかの道が盛んに利用されるようになりました。

万葉集の「直越のこのみちにてし 押照るや難波の海と 名づけけらしも」という歌は、奈良時代に大和から摂津への最短コースを通過して生駒山地を越えた旅人のものですが、まだ上町台地東のかなりの部分まで海が入りこんで入江となっていたことがわかります。

万葉集に登場したこの峠が、暗峠かどうかはさまざまな説がありますが、生駒山麓から難波京を結ぶ最短の政治・産業の道としてこの道が盛んに利用されていました。

京都に都が移った9世紀以降になると京都を中心とした道路網が整備され、淀川沿いの京街道のほか西国街道も通じ諸国の物資が往来しました。また、大阪平野を通る道として東西の高野街道や海岸沿いの熊野街道が開け、平安中期頃からは上皇や貴族のあいに四天王寺・住吉、さらに遠く高野山や熊野詣でがさかんになり、それに刺激されて庶民の参詣もいちだんと流行しました。こうした街道は単に人々や物資が通り過ぎるだけのものではなく、街道沿いの村や町に住む人々にとっては、諸国の旅人が珍しい遠い国のさまざまな情報を伝えてくれる大切な情報源でもあったのです。道は村と村をつないで作られましたが、道が発達して大勢の人が往来するようになると今度は沿道に新しい村や町も生まれました。大阪平野は京都と瀬戸内・西国・紀州を結ぶ交通上のポイントでした



平成2年当時の暗峠

から、古代から中世にかけてこうしたさまざまな街道が開かれ、産業や文化が発展してきました。

近世になると大阪と奈良を結ぶ道は北の方から傍示越道・岩舟越道・清滝越道・中垣内越道・暗嶺道・十土嶺道・立石嶺道・信貴越道・亀瀬越道などがありました。このうち最もひんぱんに利用されたのが暗嶺道、つまり暗越奈良街道で、特に豊臣秀吉が大阪に城を築き、異父弟の秀長が大和郡山城主になってからは暗越奈良街道が大阪と奈良を結ぶ最短距離の道として重要視されるようになったと考えられます。江戸時代になってもこの道は大和郡山藩の参勤交代道として利用されるとともに、西国や大阪から南都(奈良)、伊賀・伊勢方面への街道として往来がさかんでした。

江戸中期以降はさまざまな文人もここを通り、日記や文学作品にその名を記しています。江戸の儒学者貝原益軒の南遊紀行や松尾芭蕉の「菊の香にくらがり登る節句かな」などはとくに有名ですが、玉造から暗峠までの道中には多くの句碑や歌碑が建ち、文学の道としてもこの沿線の人々に強い影響を与えています。

江戸中期以降になると、庶民の伊勢参りや大和の寺巡りなどがいっそう盛んとなり街道は活気に溢れました。さらに幕末には伊勢への爆発的なお蔭参りの流行があり、無数の民衆がこの街道を通過して奈良・長谷・伊勢方面へと向かって行き、恐らく大阪府下では最も賑わい、奈良街道といえ

ばこの暗越奈良街道を指すのが当然のこととされてきました。

道はそこに行く人々にとっては、未知の世界へ通じる憧れと恐れと苦しみをもとまう場所でもありました。しかし、そこに住む人々にとっては道は未知の世界の便りを届けてくれる唯一のたてもありました。暗越奈良街道は明治の半ばからは鉄道にその地位を奪われ、また車や馬の道としても大和川沿いの亀瀬越新道が便利であったため暗峠を越す人も少なくなってしまいましたが、この街道沿いにはそれまでの長い間の多くの人々の苦労や知恵の積み重ねが、独特の旅の文化として伝えられてきました。

東成の発展のあとをたどるとき、平野川を軸とする南北の交通路とともに暗越奈良街道を軸とする東西の交通路をけって忘れてはできません。道とその周辺の神社や寺や道標や灯籠や、あるいは習慣や言い伝えの中にも私達が忘れようとしている古い歴史や文化を探る手掛かりがたくさん残っているのです。多くの古い街道が跡も残さず消えていっているなかで、私達の東成区には一部ではありますが昔のままの暗越奈良街道が残されています。文化と文明が上手にとけあった正しい未来を築くためにもこの道をお大切に、道の果たしてきた役割をきちんと認識することが大事だと思われま。

# 区勢の あらまし



今里交差点

## ◎区の中心部は今里交差点付近

主要道路の集まる今里は交通の要衝であり、当区の中心です。ここには、区役所庁舎をはじめ、保健所・消防署・警察署・府税事務所・社会保険事務所など官公庁街を形成するとともに、コミュニティ施設としての東成会館があり、また、各種金融機関等が数多く集まり、区発展の拠点となっています。

## ◎群を抜く人口密度

当区の面積は4,55km<sup>2</sup>、全市の2.06%にあたり、24区中の第23位と狭く、平成7年10月1日の推計人口は、78,736人（男=37,725人・女=41,011人、32,759世帯）で、全市の3.09%にあたり、24区中の第17位となっています。従って、1km<sup>2</sup>当たりの人口密度は17,305人で、24区中の第5位を占め、全国的にもきわめて高い密集状態を示しています。

当区の人口は、戦前の約15万人が終戦直後には約10万人と激減し、年々回復して昭和35年には約14万人近くとなりましたが、その後は減少の傾向にあります。

## ◎中小企業で東部工業地帯の一翼を形成

平成8年の事業所統計調査によると、当区の事業所数は8,275カ所、従業者数は60,902人、うち卸

売・小売業が3,428カ所、20,612人で、製造業が2,549カ所、21,624人でこれに次いでいます。

工場は総合印刷業・紙製品製造業などの大工場もありますが、多くは中小規模で、金属製品・繊維製品・機械器具製造業、出版印刷関連事業などで、1年間の製品出荷額は約3,773億円に上り、城東・生野区などとともに東部工業地帯を形成しています。

## ◎便利な交通機関・道路網

区内の交通は、明治28年の城東線の敷設にはじまり、ついで大軌電車の開通、市電の開通、バス・トロリーバス網の発達と進んできましたが、現在では、東西に地下鉄2路線（中央線・千日前線）と区内を走る11路線の市バスが区民の重要な足となっています。

道路網は、東西に築港深江線・大阪枚岡奈良線、南北に森小路大和川線・新庄大和川線・豊里矢田線が井桁状に走り、阪神高速道路東大阪線も通っています。

## ◎進む浸水・下水対策

当区は古くから一帯に土地が低く、戦後も大雨が降るとしばしば浸水に悩まされましたが、東南部浸水対策として平野川・平野川分水路の改修工事、天王寺～弁天幹線・今里～中道幹線の通水、平野川街路下調節池の完成により、その悩みも大幅に解消されました。現在、深江共同溝の建設工事が進められています。

当区は昭和58年に市内で3番目の下水の水洗化100%を達成しました。

## ◎区内の公園

区内には現在22カ所の公園があり、その面積は80,568m<sup>2</sup>となっています。緑地の少ない当区では、より快適な生活環境の整備のためにも、さらに公園の新・増設と施設の改善が望まれます。

## ◎小学校は11校、中学校は4校

区内の小学校は現在、東小橋・大成・今里・中道・北中道・中本・東中本・神路・深江・片江・宝栄の11校で、中学校は東陽・本庄・玉津・相生の4校があります。

幼稚園は市立が今里・中本・東中本・北中道・東小橋の5園と私立3園、その他各種学校があります。

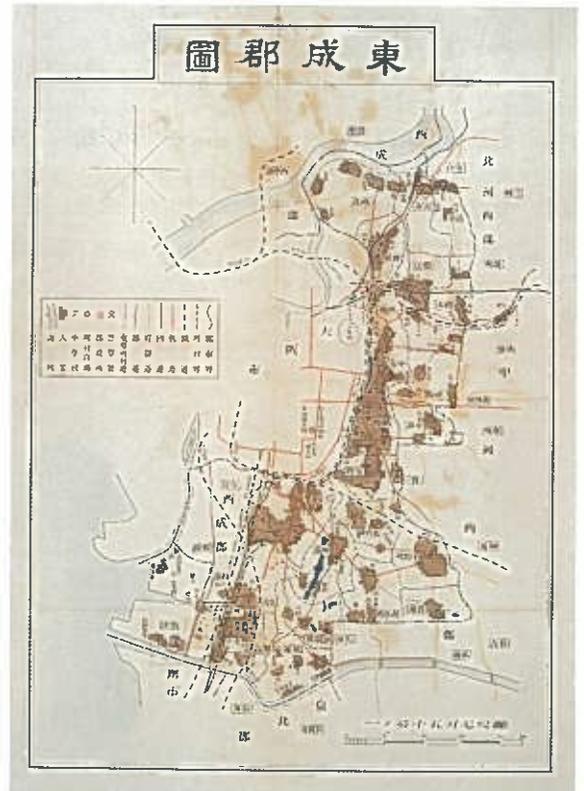
# 郷土ひがしなり 略年表



東成郡役所

- 明治元年(1868) 5月 大阪府を置く。大阪府東成郡となる。
- 5月 淀川・神崎川堤防決壊(唐崎切れ)。
- 明治5年(1872) 5月 始めて区長・戸長を置く。
- 8月 学制を發布。
- 明治8年(1875) 4月 大小区制定。東成郡は第5大区となる。
- 明治12年(1879) 2月 郡区町村編成法施行、東成郡役所を四天王寺秋の坊に設ける。
- 明治14年(1881) 1月 東成・住吉両郡合併郡役所を天王寺村に置く。
- 明治15年(1882) 3月 神路小学校の前身、阪東小学校開校。
- 明治18年(1885) 7月 淀川大洪水、当区の被害甚大。
- 明治20年(1887) 10月 中本小学校の前身、東生小学校開校。
- 明治22年(1889) 4月 市町村制施行、当区内は合併村にて発足。  
鶴橋村(旧、岡村・木野村・猪飼野村・東小橋村・小橋村)、小路村(旧、片江村・中川村・腹見村・大友村)、南新開荘村(旧東今里村・大今里村・深江村)、中本村(旧、本庄村・中道村・古屋敷地・中浜村・西今里村・森村)
- 明治23年(1890) 6月 城東練兵場開設。
- 11月 東成郡役所を天王寺六万休町に移転す。
- 明治27年(1894) 4月 大阪市章みおつくし制定。
- 明治28年(1895) 5月 城東線(現JR環状線)天王寺～玉造駅間開通。
- 10月 大阪駅まで開通。
- 明治36年(1903) 9月 市電花園橋～築港間に初開通。
- 11月 東成郵便局の前身、玉造郵便局創設。
- 明治42年(1909) 11月 東成税務署の前身、玉造税務署設置。

- 大正元年(1912) 10月 中本・鶴橋両村町制を実施。
- 大正2年(1913) 11月 城東線に鶴橋仮停車場設置。
- 大正3年(1914) 4月 大軌線(現近鉄線)上本町～奈良間開通。同時に鶴橋駅(現在地より東300m)と深江駅(現布施駅)竣工。
- 大正4年(1915) 6月 中道小学校の前身、中本第2尋常小学校開校。
- 大正5年(1916) 1月 南新開荘村を神路村と改称。
- 大正7年(1918) 7月 耕地整理事業着手。(深江・鶴橋・小路の各耕地整理組合…昭和13年8月完了)
- 8月 米騒動起こる。
- 大正8年(1919) 11月 淀川左岸水害予防組合設立。
- 大正11年(1922) 2月 大成小学校の前身、鶴橋第3尋常小学校開校。
- 9月 北中道小学校の前身、中本第4尋常小学校開校。
- 大正12年(1923) 9月 關東大震災発生。
- 10月 電灯事業市営となる。
- 大正14年(1925) 4月 第2次市域拡張により全市13区制となる。  
東成郡生野村・鶴橋町・中本町・神路村・小路村・城東村・櫻本村・鯉江町・櫻並町・城北村・古市村・清水村の4町8ヵ村の区域



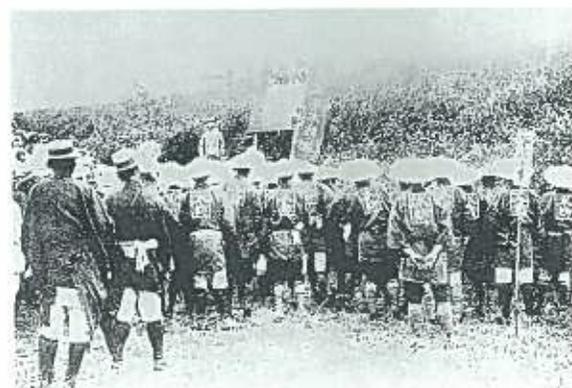
東成郡図

を大阪市へ編入、「東成区」とする。第1次東成区成立。  
鶴橋木野町の旧鶴橋町役場で業務開始。

- 昭和2年(1927) 2月 第1次都市計画道路上六〜今里間竣工。  
2月 市バス阿倍野〜平野間に初開通。  
3月 市電下味原〜今里間開通。  
10月 東成消防署の前身、東消防署中本出張所開設。消防車1台配置。
- 昭和3年(1928) 4月 東成警察署の前身、中本警察署設置。
- 昭和4年(1929) 2月 土地区画整理事業着手。(今里片江・深江・神路の各土地区画整理事業組合…昭和28年7月完了)
- 昭和5年(1930) 3月 市電気局自動車部営業課今里営業所を開設。  
7月 東成区役所を現在地に移転す。
- 昭和6年(1931) 2月 東小橋小学校の前身、鶴橋第3尋常小学校東小橋分校開校。  
3月 参急急行線上下本町〜宇治山田間全通。  
6月 今里小学校の前身、今里尋常小学校開校。  
11月 大阪城天守閣竣工。
- 昭和7年(1932) 4月 城東線(現JR環状線)森之宮駅開設。市バス玉造〜今里間開通。  
9月 大軌(現近鉄)連絡駅として城東線に鶴橋駅開設。大軌今里駅(前身は片江駅)開設。  
10月 当区から「旭区」が分区。第2次東成区成立。
- 昭和8年(1933) 5月 地下鉄梅田〜心斎橋間に初開通。
- 昭和9年(1934) 9月 室戸台風来襲。
- 昭和9年(1934) 今里ロータリー完成。(昭和28年廃止)
- 昭和10年(1935) 3月 大阪市歌制定。  
12月 東成消防署開庁。
- 昭和13年(1938) 10月 東中本小学校開校。



摂津東成森ノ宮近傍民家水害防止工事



淀川左岸水害予防組合



昭和2年消防車配置

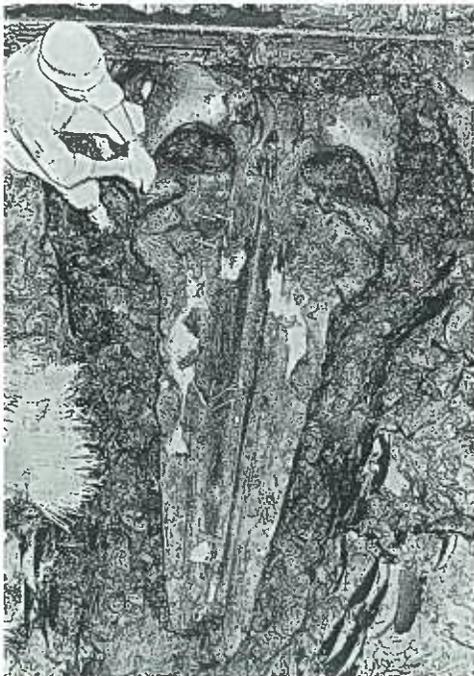


今里ロータリー



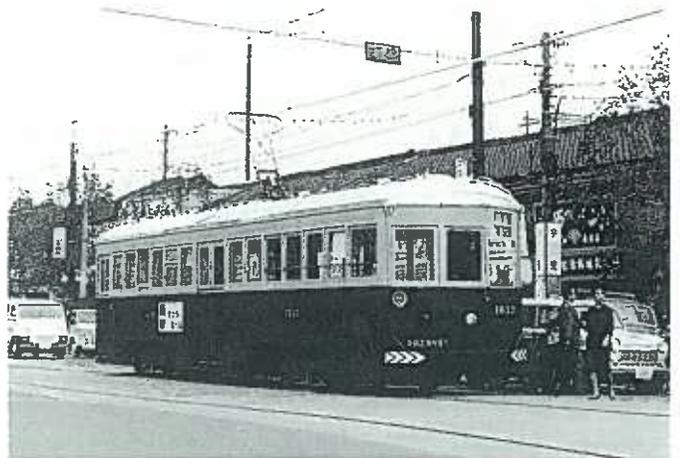
昭和初期の市バス

- 昭和14年(1939) 4月 深江小学校開校。  
 昭和15年(1940) 6月 片江小学校開校。  
 昭和16年(1941) 1月 玉津会館の前身、東成市民館開館。  
 12月 大東亜戦争始まる。  
 昭和18年(1943) 4月 大阪市22区制を実施、当区から「城東区」「生野区」が分区。第3次東成区成立。  
 5月 中浜小児健康相談所内に東成保健所設置。  
 昭和19年(1944) 10月 市電玉造～今里間開通。  
 昭和20年(1945) 6月 米機大空襲により当区の被害甚大。  
 8月 終戦。  
 昭和21年(1946) 大阪市戦災復興土地地区画整理事業着手。(区内では玉造地区)  
 昭和22年(1947) 4月 新制中学、第1中学校(現東陽中学校)、第2中学校(現本庄中学校)、第3中学校(現玉津中学校)開校。  
 5月 日本国憲法施行。地方自治法施行。  
 昭和25年(1950) 6月 東成府税事務所を設置。  
 9月 ジエーン台風来襲。  
 昭和27年(1952) 4月 宝栄小学校開校。講和条約発効。  
 昭和28年(1953) 7月 東成区福祉事務所開設。  
 9月 トロリーバス大阪駅前～神崎橋間に初開通。  
 昭和30年(1955) 4月 第4中学校(現相生中学校)開校。  
 8月 大今里本町1丁目の下水工事現場で独木舟発掘される。



発掘されたミンククジラの化石(朝日新聞社提供)

- 昭和31年(1956) 2月 今里ポンプ場完成。  
 昭和32年(1957) 4月 トロリーバス今里～守口間運転開始。森之宮東の町～縁橋間市電運転開始。  
 昭和33年(1958) 3月 「町を静かにする運動」始まる。  
 昭和34年(1959) 4月 皇太子明仁親王殿下(今上天皇)ご成婚。  
 昭和36年(1961) 4月 国鉄大阪環状線開通。  
 9月 第2室戸台風来襲。  
 昭和37年(1962) 1月 交通事故をなくす運動始まる。  
 昭和39年(1964) 4月 町を縁にする運動始まる。  
 10月 東京オリンピック開催。  
 昭和40年(1965) 10月 市立小児保健センター完成。  
 昭和41年(1966) 8月 大今里本町2丁目の地下鉄工事現場で6千年前のミンククジラの骨発掘される。  
 昭和43年(1968) 4月 東成保健所新庁舎落成。  
 7月 地下鉄中央線森之宮～深江橋間開通。  
 7月 郵便番号制実施。東成区は〒537。  
 昭和44年(1969) 2月 東成消防署新庁舎落成。  
 4月 東成区役所新庁舎落成。大阪市電全廃となる。  
 7月 地下鉄千日前線、今里まで開通。(9月)新深江まで開通。  
 昭和45年(1970) 3月 日本万国博覧会開幕。  
 6月 トロリーバス全廃。  
 9月 住居表示実施。現在の町名となる。  
 昭和46年(1971) 3月 千筒川埋立工事完成。  
 昭和47年(1972) 4月 東母子寮開所。  
 9月 台風20号来襲、平野川溢水。  
 昭和48年(1973) 3月 菅笠・銅鏡を伊勢神宮に奉納。(深江)  
 昭和49年(1974) 7月 分区実施。22区から26区となる。  
 8月 東成勤労青少年ホーム開館。



在りし日の大阪市電

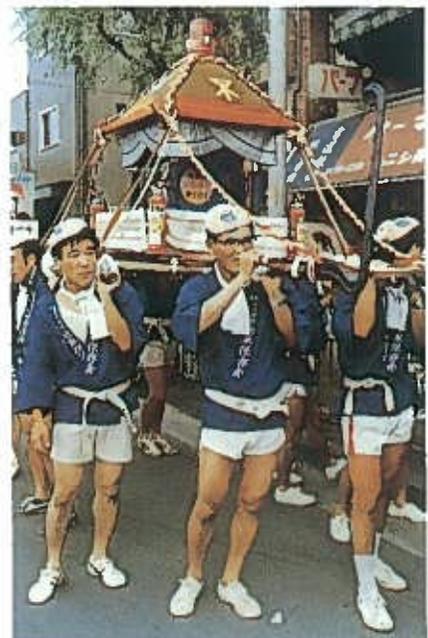
- 8月 コミュニティまつり納涼の夕べ  
(区民まつり) 開催。
- 12月 阪神高速道路(中央大通) 完成。
- 昭和50年(1975) 7月 沖繩海洋博覧会開幕。
- 8月 区制50年記念のつどい開催。
- 昭和51年(1976) 2月 平野川恒久護岸工事完成。
- 4月 総合区民センター東成会館落成。  
旧東成会館は玉津会館に名称変更。  
今里休日急病診療所開設。
- 5月 東成区老人福祉センター開設。
- 6月 東成図書館開設。
- 8月 東成区民まつり始まる。
- 11月 中本2丁目で不発爆弾発見、処理。
- 昭和53年(1978) 6月 小児保健センター新館完成。
- 昭和56年(1981) 12月 地下鉄千日前線新深江～南箕岡開通。
- 昭和58年(1983) 10月 大阪21世紀計画スタート。
- 昭和59年(1984) 8月 「好きやねん大阪」区民運動推進  
大会開催。
- 昭和60年(1985) 3月 科学万博つくば'85開幕。
- 4月 地下鉄中央線深江橋～長田間開通。
- 昭和61年(1986) 10月 地下鉄中央線が生駒まで直通運転。
- 12月 玉津橋の架け替え完成。
- 昭和62年(1987) 9月 老人問題を考えるシンポジウム開  
催。
- 昭和63年(1988) 8月 区の花制定。(バラ・パンジー)
- 平成元年(1989) 2月 合区実施、大阪市24区制に。
- 8月 大阪市制100周年記念東成区各種  
行催事実施。(元年8月～2年9月)
- 平成2年(1990) 4月 国際花と緑の博覧会開幕。
- 平成8年(1996) 7月 ひがしなりだより創刊。
- 12月 市政情報「みおつくしネット」ス  
タート。
- 平成9年(1997) 6月 東成区在宅サービスセンターオー  
プン。
- 平成10年(1998) 5月 おとしよりすこやかセンターオー  
プン。
- 5月 東成スポーツセンターオープン。
- 5月 東成プールオープン。
- 6月 不発弾処理。(中道1丁目)
- 8月 東成区青少年育成推進会議発足。
- 平成11年(1999) 11月 大阪オリンピック招致東成区推進  
協議会発足。
- 12月 不発弾処理。(中本4丁目)
- 平成12年(2000) 3月 大阪市都市計画道路豊里矢田線開  
通。
- 3月 東成区高度浄水処理水通水。



地下鉄中央線森ノ宮～深江橋間開通



東成区役所現庁舎



初期の東成区民まつり



バラ

パンジー



〈協 力〉

大阪市立博物館 大阪城天守閣

〈参考文献〉

東成郡史 東成郡最近発達史 東成区史 東成消防のあゆみ  
大阪府神社名鑑 日本の古鏡 深江小学校創立50周年記念誌 他

〈地図提供〉

大阪市立中央図書館 大阪城天守閣

## ひがしなり

— みつめよう我がふるさと —

発 行 日 平成12年3月31日

編集・発行 大阪市東成区役所企画総務課広聴企画係  
大阪市東成区大今里西2-8-4  
電話 06-6977-9683

印刷・製本 ナニワ美術印刷株式会社

玉造二軒茶屋  
石橋旧跡

